

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

X

市営長吉長原東第2住宅第3期建設工事に伴う

発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

X

市営長吉長原東第2住宅第3期建設工事に伴う

発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会



NR1001(西半)

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

X

市営長吉長原東第2住宅第3期建設工事に伴う

発掘調査報告書

2003.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

長原遺跡は、1973年の地下鉄谷町線建設工事に先立つ試掘調査によって発見された、学
史的には新しい遺跡だが、既調査では日本通史解明の一助となる考古資料を蓄積してきた。

今回報告する大阪市営長吉長原東第2住宅建設工事に伴う発掘調査は、長原遺跡東地区に
位置し、旧六反村域に当る場所で行われた。六反村は、庄屋であった小枝家に良質な中近世
文書が伝わることでも夙に有名である。

当調査地周辺でも、後期旧石器時代における石器製作の場、縄文時代晚期から弥生時代に
かけての農耕開始時の遺構、古墳時代の住居など多数が発見され、成果を挙げている。今回
の調査で得られた資料も、長原遺跡の全体像を理解するための新たな材料となろう。

最後に、発掘調査および本書の作成に協力をいただいた大阪市住宅局、ならびに関係各位、
玉稿を寄せていただいた先生方に、深く感謝の意を表する。

2003年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇田 修

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市住宅局の委託を受け、2001年10月～2002年3月に平野区長吉六反3丁目で実施した長吉長原東第2住宅第3期建設工事に伴う発掘調査(NG01～32次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市住宅局の負担による。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋覚の指揮のもと、調査第2係主任学芸員黒田慶一が行った。調査の面積・期間は第Ⅱ章第1節に記す。

一、本書の作成は京島・調査課調査第2係長高橋工の指揮のもと、黒田が行い、大阪市立大学大学院理学研究科の松江実千代氏と大阪市史料調査会主任調査員の渡邊忠司氏の玉稿を賜った。英文要旨の作成は黒田が行い、ロンドン大学大学院生の幕内博子氏の御教示を得た。

一、基準点測量および写真測量は、株式会社かんこうに委託した。

一、遺構写真は黒田が撮影し、遺物写真の撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。

一、本書に掲載した石器遺物は、大阪市文化財協会での石器整理番号である登録番号で管理されている。弥生時代以前の各石器遺物の登録番号は、本文で使用した報告番号の前に01ACを付加したものとする。例：報告番号44の場合は01AC44。

一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料は、すべて当協会が保管している。

凡　　例

1. 本書で用いた層位学・堆積学に係わる用語は[趙哲済1995]に準じる。また、本書で示した長原遺跡標準層序との対比は[趙哲済2001]に拠った。長原遺跡標準層序の表記は、本文中では長原○層、図表等ではNG○層とした。
2. 遺構名の表記は、溝(SD)、自然流路(NR)、その他の遺構(SX)の略号の後に層序番号を冠し、その後に通し番号を付している。例えば、第10層上面検出の自然流路はNR1001とした。
3. 遺物には本書での通し番号を順に付した。
4. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±○mと記した。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値の記載のあるものは国土平面直角座標(第VI系)の値である。
5. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1967]に従った。
6. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類は次の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することはしなかった。
古墳・飛鳥時代の須恵器(TK217型式まで)：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、
中世の土器・陶磁器：[中世土器研究会1995]、近世の陶磁器：[九州近世陶磁学会2000]・[大橋康二1994]
肥前陶磁器の時期区分は以下のとおりである。
I期：1580～1610年代、II期：1610～1650年代、III期：1650～1690年代、IV期：1690～1780年代、
V期：1780～1860年代

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡の調査概要	1
第1節 遺跡の立地と歴史的景観	1
第2節 長原遺跡東地区の歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 調査に至る経緯と経過	5
第2節 層序と各時代の遺構・遺物	7
1) 調査地の層序	7
2) 各層出土の遺物	9
i) 第1層出土遺物	ii) 第2層出土遺物
iii) 第6c層出土遺物	iv) 第7層出土遺物
v) 第8層出土遺物	vi) 第9層出土遺物
vii) 第10層出土遺物	viii) 第11層出土遺物
ix) 第12a層出土遺物	x) 第13層出土遺物
3) 縄文時代以前の遺構	13
i) 第16層上面遺構	
4) 弥生時代の遺構と遺物	13
i) 第12a層上面検出遺構	ii) 第10層上面検出遺構
iii) NR1001出土の遺物	
5) 中世以降の遺構	17
i) 鎌倉時代の踏込み	ii) 近代の畑
6) 小結	17
第Ⅲ章 遺構と遺物の検討	19
第1節 NG01-32次調査地における花粉分析(中間報告)	19
1) はじめに	19
2) 試料について	19
3) 分析方法	19

i)試料の処理	ii)花粉化石の同定と統計処理
4)分析結果	20
5)考察	24
6)おわりに	25
第2節 村絵図にみる河内国丹北郡六反村の景観と変化	26
1)はじめに	26
2)近世検地と村域の確定	27
3)絵図にみる六反村の特色	29
4)絵図と字地からみた六反村の変化	34
5)おわりに	36
第IV章　まとめ	39
引用・参考文献	41
あとがき・索引	

英文目次・要旨

図 版 目 次

- 1 地層断面
上：第1～6b層(東壁中央)
中：第6c～17層(北壁中央)
下：東区NR1001断面(南東から)
- 2 西区第15・16層上面調査状況
上：トレンチ配置(南から)
中：トレンチ配置(西から)
下：北端第16層上面の流路(西から)
- 3 弥生時代流路 遺物と第16層上面検出状況
上：東区土器出土状況(北から)
中：西区石器出土状況(北西から)
下：東区第16層上面全景(東から)
- 4 弥生時代流路(1)
- 5 弥生時代流路(2)
上：西区全景(西から)
中：西区NR1001(北から)
下：西区NR1001断面(北東から)
- 6 中世～現代の遺構
上：東区第5層上面検出足跡(北から)
中：市営住宅建設工事直前の畑(南から)
下：市営住宅建設工事直前の畑(東から)
- 7 繩文～弥生時代の遺物
- 8 古墳～飛鳥時代の土器
- 9 古墳～江戸時代の土器・陶磁器

挿 図 目 次

- 図1 長原遺跡の位置 1
図2 長原遺跡の各地区と周辺の遺跡 2
図3 「六反村田畑明細図」(絵図19)のトレース図 4
図4 NG01-32次調査地と周辺の既往調査 5
図5 調査地位置図 6
図6 南壁・東壁断面 8
図7 第1・2層出土遺物 10
図8 第6c・7層出土遺物 11
図9 第8～11層出土遺物 12
図10 第12a・13層出土遺物 12
図11 第16層上面検出遺構とNR1001断面 13
図12 NR1001と遺物出土状況 14
図13 石器遺物 15
図14 NR1001出土遺物 15
図15 NR1001出土石庖丁 15
図16 第5層上面足跡 16
図17 第1層上面畑 16
図18 NG01-32次調査 試料採取位置図 19
図19 北壁の分析試料採取層準 20
図20 NG01-32次 花粉ダイアグラム 21
図21 絵図8のトレース図 29
図22 近代の字地 34
図23 長原9A層上面の埋没古地形と集落の分布 39

表 目 次

- 表1 NG01-32次調査層序表 9
表2 産出頻度の低い花粉・胞子分類群 22-23

写 真 目 次

写真1	昭和23(1948)年の六反村々域	3
写真2	絵図10 「六反村田畠井路絵図」	26
写真3	昭和36(1961)年の六反村々域	26
写真4	絵図12 「六反村田畠井路絵図」	27
写真5	絵図23 「新大和川水利図」	28
写真6	絵図8 「水論絵図」	28
写真7	絵図1 「稲垣摂津守所替之時被召六反村絵図」	30
写真8	絵図17 「六反村絵図」	31
写真9	絵図19 「六反村田畠明細図」	32
写真10	絵図14 「六反村絵図」	33
写真11	絵図15 「六反村絵図」	35

第Ⅰ章 長原遺跡の調査概要

第1節 遺跡の立地と歴史的景観

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原周辺に所在する旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、その範囲は約2km四方に及ぶ。遺跡は河内台地から北へ突出した瓜破台地の東半部と、その北東に拡がる沖積地に立地する。周辺には旧大和川流域に存在した、いわゆる“平野遺跡群”が展開し、長原遺跡はその南端部に位置する(図1・2)。

長原遺跡は、1973年に地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査で数基の古墳が発見され、以後30年間継続して発掘調査が行われている。現在、遺跡は8つの地区に区分され、それぞれ東北・東・東南・北・中央・南・西・西南地区と呼称する。長原遺跡調査の特徴は、層位学的発掘を標準層序と対照しながら実施し、旧石器時代から現代までの地形環境の変遷と、それに係わる人間の営為が、遺跡全体で解明されつつあることである。

当遺跡の人間の活動痕跡は後期旧石器時代までさかのぼり、東南・東北地区では石器製作址が確認されている[大阪市文化財協会1995・2000a]。それ以前の中位段丘構成層内で、ナウマンゾウやオオツノジカの足跡化石も発見されている[大阪市文化財協会1999c]。

縄文時代においては、草創期の尖頭器をはじめ、早期から晩期にかけての土器・石器が見つかっている。東北地区では住居址と考えられる凹みから、大阪市内最古の縄文早期(約8,500年前)の土器が出土した[大阪市文化財協会2002b]。また、東南地区の晩期末の住居址や墓で、糊痕が残る長原式土器と棺に利用された弥生土器が見つかり、縄文文化と弥生文化の交流が確認された[大阪市文化財協会1983a]。

弥生時代には当遺跡においても本格的な地域開発が進み、中期前葉の水田跡[大阪市文化財協会1999a]、中期後葉の方形周溝墓[大阪市文化財協会1996a]、後期の竪穴住居[大阪市文化財協会1982a]など、各時期の遺構・遺物が沖積平野部を中心に広範囲に分布している。集落は中期には沖積平野の自然堤防上に集まり、後期になると分散する[大阪市文化財協会2002c]。これは大阪湾沿岸の弥生集落の動向と軌を一にしている。

古墳時代前期末から後期前半にかけて、台地部で多数の古墳が築かれる。これまでに調査された212基は、大

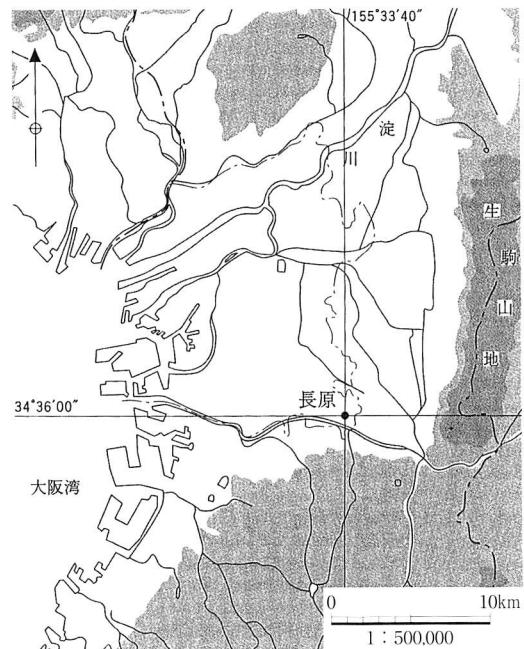


図1 長原遺跡の位置

半が1辺15m以下の方墳で、形象埴輪をもつことを特徴とする[大阪市文化財協会1990]。5世紀中葉の集落は東・東南地区が中心で、韓式系土器の出土を見ることから、渡来系集団が居住したと考えられる[大阪市文化財協会2002c]。5世紀後葉以降は集落の中心は西・中央地区に移動し、比較的大きな掘立柱建物が主体となる[大阪市文化財協会1993a]。

飛鳥～奈良時代には台地上に、東除川を基幹とする灌漑用水路が掘られ、広範囲で水田開発が進められる。この大規模な開発事業の拠点と思われる掘立柱建物群が、中央・西地区の「馬池谷」周辺と、西南地区から瓜破遺跡南東部にかけて見つかっている[大阪市文化財協会1992a・1994・1996b・2000c]。しかし、奈良時代末～平安時代初めの洪水のため、台地上の水田は壊滅的な被害を受ける[大阪市文化財協会1992b]。

平安時代後半には遺跡全体に方格地割(条里)が敷かれ、田畠が整備される。また、屋敷地も条里の規制を受けて設置される。集落は平安時代から鎌倉時代にかけては分散しているが、室町時代に入ると集村形態を取るようになる[大阪市文化財協会1982c]。



図2 長原遺跡の各地区と周辺の遺跡

第2節 長原遺跡東地区の歴史的環境

今回調査地の周辺ではNG92-39次調査では弥生時代の石器作りを行った住居址が見つかり[松本百合子・久保和士1993]、NG95-36次調査では弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代の大型建物が検出され[大阪市文化財協会1996a]、NG00-11次調査では縄文時代以前の石器製作の場が見つかる[大阪市文化財協会2002a]など、各時代の遺構が濃密に分布している。八尾南遺跡も含めた旧石器～江戸時代に至る発掘成果は既報告[大阪市文化財協会2002a]で通観しているので、ここでは今回の調査地が含まれる旧六反村の中近世の景観を、小枝家文書を基に概観しておきたい。

旧六反村域は、現在の平野区長吉六反1～5丁目にはほぼ踏襲されている[第Ⅲ章第2節渡邊論文参照。ただ旧村域の南西隅2町(字「丁地」の西半と字「キロ口」)は長吉長原東2丁目に、最南端の1町(字「六ツ坪」)は長吉長原東3丁目に編入されている]。

小枝家は江戸時代を通じて庄屋に任じた旧家で、小枝三郎右衛門を祖とし、中世文書の写し、近世文書、記録類を収蔵する。六反村はもと土師郷内で赤阪村と呼ばれた(現、赤坂神社はその遺称と考えられる)が、元弘年間(1331～34年)の南北朝の内乱に際し、楠木氏の赤阪城の地と混同されることを恐れ、六反村に改められたといい、小枝氏も当地の土豪と考えられている。系図上の初祖・三郎右衛門は戦国時代、高屋城主・河内守護代遊佐信教に仕え、その息子助次郎も信教に従うが、遊佐氏が大坂本願寺に味方して織田信長と戦ったため、遊佐氏は滅亡を余儀なくされ、小枝氏も六反村に帰郷したものと思われる[田中豊1983]。

六反村の支配は天正11(1583)年以降、元和元(1615)年以前は豊臣領で、その後、天領(幕領)と役知を四たび繰返し、文化10(1813)年、小田原藩主大久保加賀守の所領となり、明治維新に至る。近代まで伝わった字名は、小枝家文書中の文禄3(1594)年『河内丹北郡六反村検地帳』でも見られることから、村域の確定と多くの字名の成立は、中世までさかのぼると考えてよからう。

六反村の村落(居村・在家ともいう)は江戸時代に至っても周囲に水路を巡らすことから、中世には環濠集落であったと思われ、また、村落の東・西・北にはそれぞれの「浦」地名をもち、北には「橋嶋」「溝ノ川」「西溝」「金池」など水に関する字

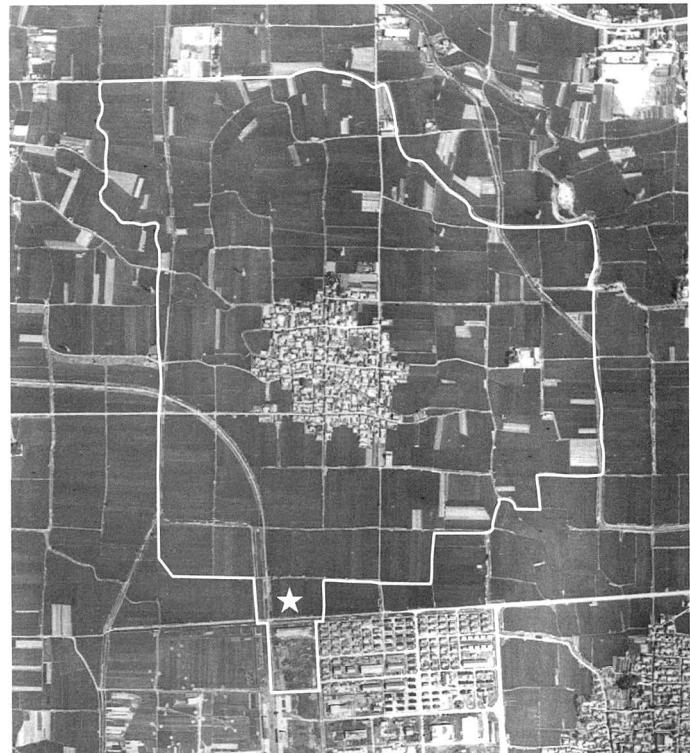


写真1 昭和23(1948)年の六反村々域

(米軍撮影航空写真より、☆は今回調査地。縮尺は1/15,000)



図3 「六反村田畠明細図」(絵図19)のトレース図

したとされる元禄年間(1688~1704年)をさかのぼる数十年前に、六反村では綿作が定着していた可能性が高い。中世を通じて日朝貿易の主要輸入品であった綿布は、朝鮮の役(1592~98年)を経て十数年で、大都市大坂を控えた当地で、商品作物として根付いたと考えられる。六反の地は中世以来栄える平野環濠都市とは指呼の間にあり、平野川をはじめ水路のみならず、陸路も大和・摂津・和泉へ四通八達している。各時代の他地域との交流も検討課題である。

名があることから、村落の北面は水域に頼って防禦を行った可能性がある。今回調査地は村落から南へはずれた字「五反地」で、中近世においては建物の跡などは検出されず、荒地もしくは耕作地であったと考えられた。

小枝家文書で特筆される農業関係の史実を、[田中豊1983]に拠りながら、以下で若干紹介したい。

慶長18(1513)・19年の「免状」の署名者は、「慶長十八年二作申瓜ノ入用」の宛名人の「多羅尾半左衛門」であり、彼は片桐市正内の物頭をつとめた人物である。このことから、六反の地が瓜の特産地であり、豊臣家へ献上されていたことがわかる。しかも、そこで肥料として「油かす」のほかに「いわし」、すなわち干鰯が使用されている。予想外に早い金肥の使用は、この地ですでに綿作が行なわれていた可能性を示すと考えられる。寛永9(1632)年の「免状」の年貢の内訳の中に「わた」分が記載されていることから、通説で綿作が一般化

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査に至る経緯と経過

NG01-32次調査地は長原遺跡東地区に当る平野区長吉六反3丁目に所在する。周辺ではこれまでに市営住宅の建替え工事などに伴い、多くの調査が実施されてきた(図4)。

調査区には昭和36(1961)年建設の鉄筋住宅が建てられていたが、近年、老朽化に伴い、高層住宅への建替えが計画された。これまでに周辺で行われた調査では、縄文時代から江戸時代にいたる遺構や遺物が多数検出されていることから、工事に先立って、調査を行うことになった。調査面積は780m²で、平成13年10月9日から土留め工事などの調査の準備工事を行った。

調査区は東西30m、南北26mで、掘削深度も深いことから、排土の置場が問題となり、最初に現代盛土である地表下約1.3mまでを重機で掘削し、その後は調査区を東西に二分して、東半の調査を終えた後、西半の発掘にかかるとした。東・西2区とも、基本的に人力によって掘削を進めたが、経費・労力の節減と時間の短縮を図るために、重機掘削も併用した。最初の計画どおり掘削は地表下4.0mまでとした。

調査では、検出した遺構を写真・図面で適宜記録し、出土遺物については平面的な位置・出土地層などを記録した上で取上げながら作業を進めた。平成14年1月29日に東区の調査を終え、即、排土に地盤改良剤を混ぜながら埋戻しを行い、続いて西区の掘削に移った。写真測量は2回予定していた

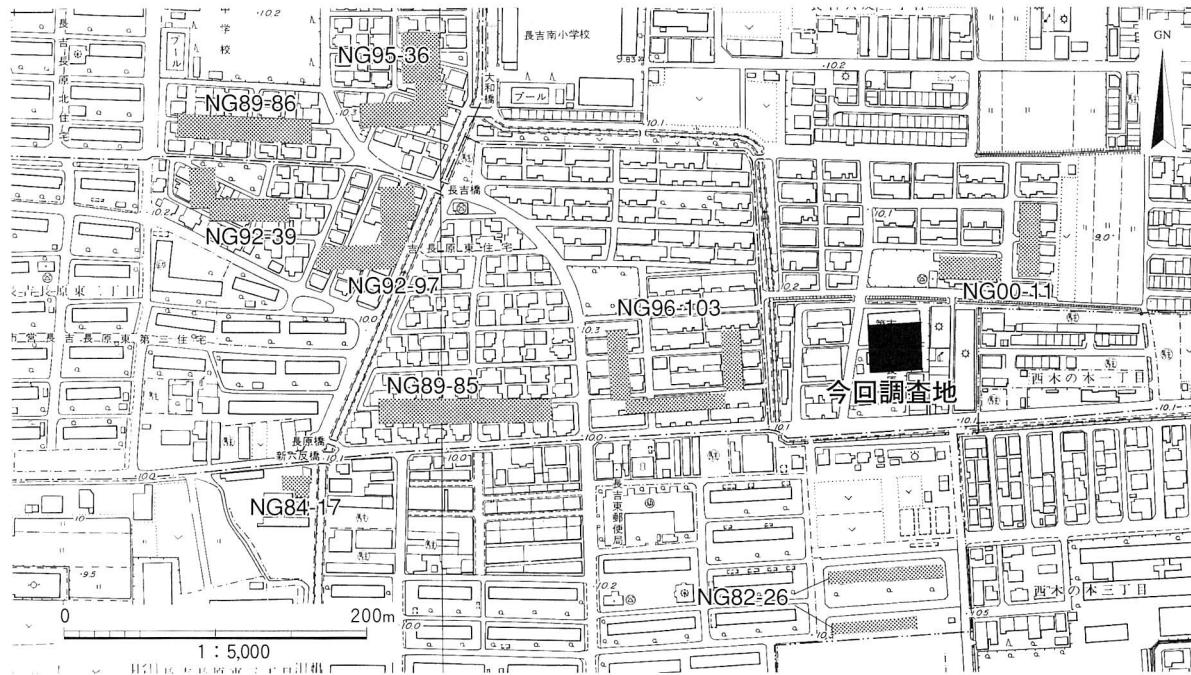


図4 NG01-32次調査地と周辺の既往調査(長原遺跡全体に対する位置は図2参照)

が、東・西2区一度ずつ、弥生時代の生活面で行うこととした(平成14年1月11日と2月14日)。2月20日、弥生時代流路下層の低位段丘構成層中からスクレイパーが出土したことから、トレーナーを設定して旧石器調査を行ったが、以後、石器遺物は出土しなかった。前記のスクレイパーは磨滅していることから、弥生時代の自然流路に伴うものと結論づけた。また、平成13年12月20日には大阪市立大学大学院理学研究科の松江実千代氏による地層サンプルの採取が行われた。平成14年2月28日、調査を終了し、西区の埋戻し、整地作業、H鋼の抜取りを行い、周囲の囲いを撤去し、3月27日すべての現場作業を終了した。

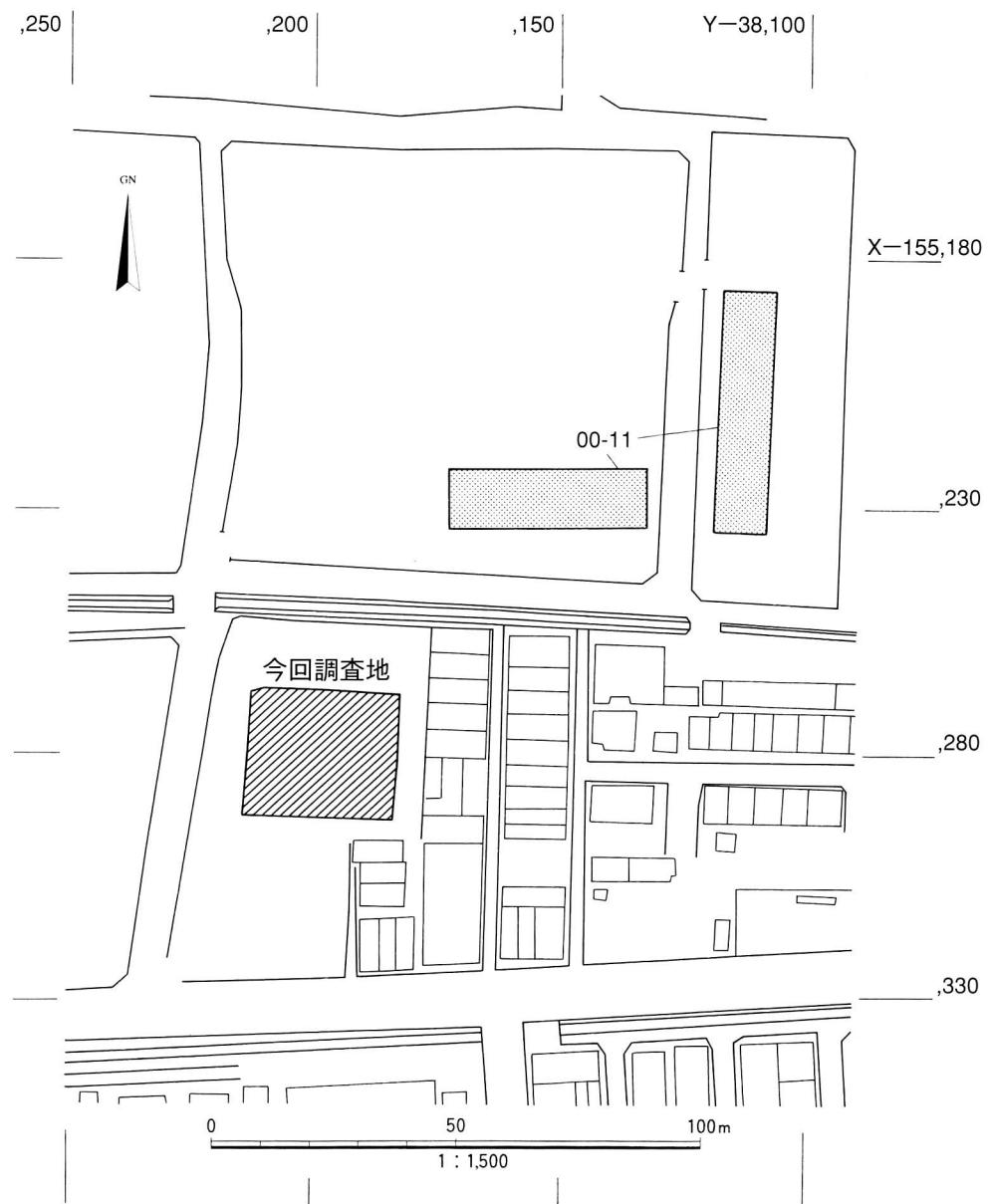


図5 調査地位置図

第2節 層序と各時代の遺構・遺物

1) 調査地の層序(図6、表1、図版1)

第0層：層厚約130cmの粗粒砂を主体とする現代盛土層である。大阪市建設局によれば、昭和36(1961)年の市営住宅建設時に施工された。

第1層：層厚約10cmのオリーブ黒色シルトからなる現代の畑作土である。上面に畝間溝が見られた。

第2層：層厚20～30cmの暗オリーブ灰色粗粒砂混り粘土質シルトの作土層で、江戸時代の遺物を含む。

第3a層：南部にのみ分布する層厚5cmのオリーブ黒色粘土質シルト層である。

第3b層：層厚10～20cmの灰色粘土質細粒砂層である。

第4層：層厚約10cmの灰オリーブ色細粒砂の水成層で、よくラミナをとどめていた。

第5層：層厚4～10cmの灰色シルト層でラミナをとどめるが、南部では分布しない。

第6a層：層厚約70cmの灰オリーブ色粘土質シルト層で、下層の第6b層との層理面が不明瞭であり、下面是凹凸が激しい。分析試料採取地点では、i・ii層に細分された。

第6b層：層厚約20cmのオリーブ黒色粘土質シルト層で、下層の第6c層との層理面が不明瞭であり、下面是凹凸が激しく、層中に生痕化石が見られた。

第6c層：層厚約30cmのオリーブ黒色粘土質シルト層で、下面の凹凸が著しい。

第7層：層厚4～10cmの有機物がラミナをなすオリーブ黒色粘土質シルト層で、5世紀後半の須恵器杯、7世紀中頃の土師器杯を含む。分析試料採取地点では、i・ii層に細分された。長原6Aii層に相当すると考えられる。

第8層：層厚10～25cmの灰色粘土質シルト層で、長原6B層に相当すると思われる。

第9層：層厚4～10cmの淡い暗色帶である灰色粘土質シルト層で、水漬き状態での堆積と思われ、長原7A層に相当すると考えられる。

第10層：層厚20～40cmの暗オリーブ灰色粘土質シルト層で、長原8B層に相当すると思われ、上面でNR1001を検出した。

第11層：層厚20～40cmの暗オリーブ灰色粘土質シルトの水成層で、長原8B～9A'層に相当すると考えられ、生痕化石が顕著である。

第12a層：層厚15～20cmの暗オリーブ灰色粘土質シルト層で、生痕化石が顕著である。以下の第12b・12c層とともに、長原9B層を構成すると考えられる。

第12b層：層厚10～20cmの暗緑灰色粘土質シルト層で、生痕化石が顕著なところと、よくラミナが遺存するところがある。

第12c層：層厚約20cmの暗緑灰色粘土質シルト層で、ラミナが見られた。

第13層：層厚約20cmの暗色帶で、黒～黒褐色粘土質シルトからなり、長原9C層に相当する。

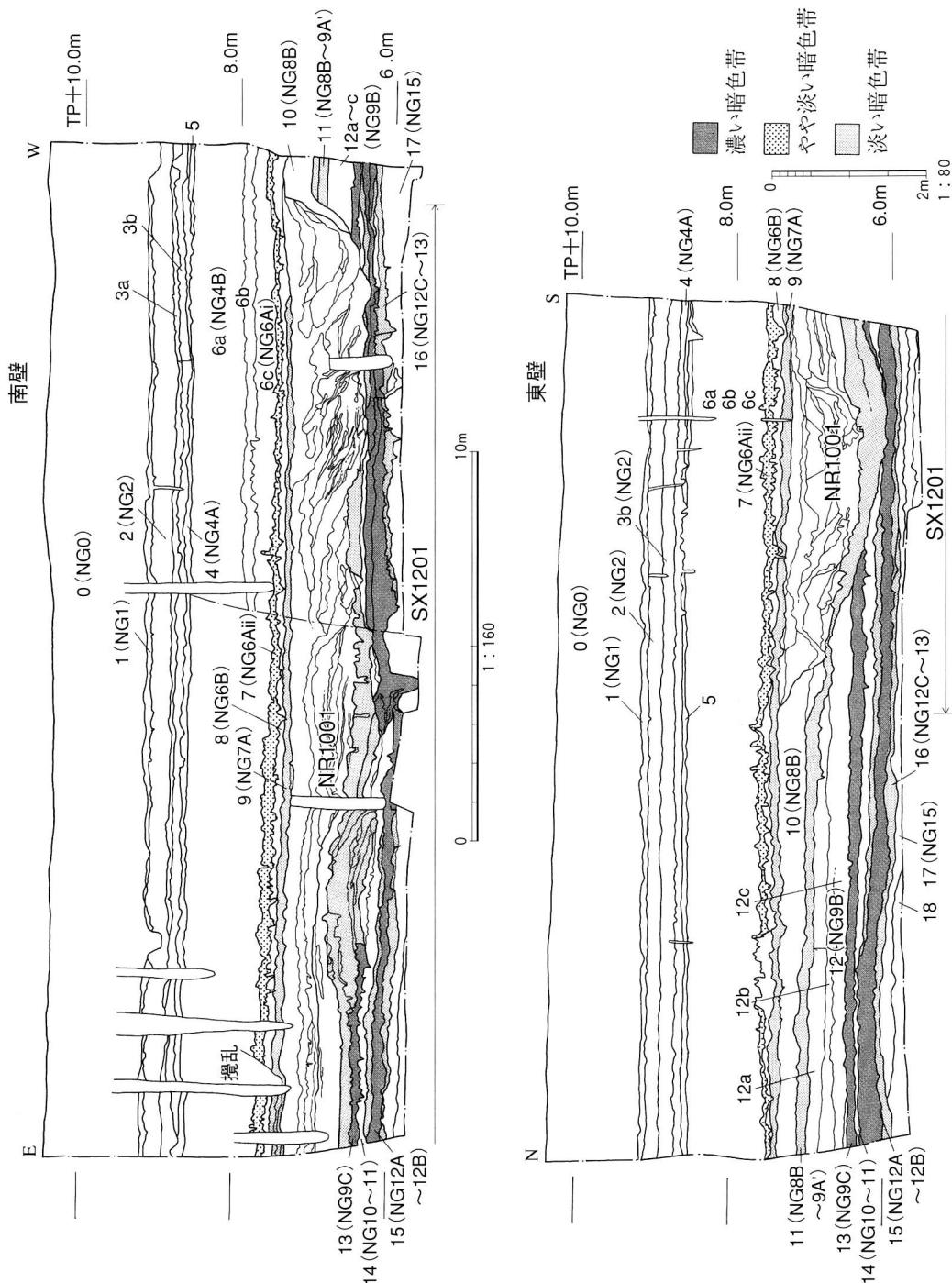


図6 南壁・東壁断面

第14層：層厚5～20cmの黒褐色粘土質シルト層で、長原10～11層に相当すると考えられる。

第15層：層厚10～30cmの暗色帯で、灰～オリーブ灰色粘土質シルトからなり、長原12A～12B層に相当すると思われる。

第16層：層厚5～20cmの灰色シルト層で、火山灰を顕著に含む。倒木痕の埋土でもある。長原12C～13層に相当すると思われる。

第17層：層厚10～20cmの黒褐色シルト層で、以下の第18・19層とともに長原15層を構成すると考えられる。

表1 NG01-32次調査層序表

NG01-32層序	層相	層厚	特徴	遺構	遺物	時代	NG層序
第0層	粗粒砂	=130	現代盛土	←畠間溝	肥前陶磁器・土師皿	近・現代	NG0
第1層	オリーブ黒色(10Y3/1)シルト	≤10	現代作土				NG1
第2層	暗オリーブ灰色(5GY3/1)粗粒砂混り粘土質シルト	20~30	作土	肥前陶磁器・関西陶器		江戸	NG2
第3a層	オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト	5	作土				NG2?
第3b層	灰色(10Y4/1)粘土質細粒砂	10~20	作土	←ビット ←踏込み		鎌倉～室町	NG3
第4層	灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂	≤10	氾濫性堆積物				NG4A
第5層	灰色(7.5Y4/1)シルト	4~10	←踏込み	須恵器・土師器	鎌倉	NG4A?	
第6a層	灰オリーブ色(5Y4/1)粘土質シルト	≤70				作土	平安～鎌倉
第6b層	オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト	≤20	作土	←踏込み	須恵器・土師器	奈良	NG4B
第6c層	オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土質シルト	≤30	作土				NG4C
第7層	オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土質シルト	4~10	植物遺体多く含む	←踏込み	須恵器・土師器	飛鳥	NG6Ai
第8層	灰色(10Y4/1)粘土質シルト	10~25					NG6Aii
第9層	灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト	4~10	根跡顯著	←NR1001	須恵器・土師器	飛鳥	NG6B
第10層	暗オリーブ灰色(2.5GY3.5/1)粘土質シルト	20~40					NG7A
第11層	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト	20~40	根跡顯著	←NR1001	弥生土器・石器	弥生	NG8B
第12a層	暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルト	15~20					NG8B~9A'
第12b層	暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土質シルト	10~20	根跡顯著	←流路 ▽倒木痕	長原式土器	繩文後～弥生前期	NG9B
第12c層	暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土質シルト	≤20	根跡顯著				NG9C
第13層	黒(5Y2/1)～黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	≤20	根跡顯著	←流路 ▽倒木痕	後期旧石器～繩文	NG10～11	NG10～11
第14層	黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト	5~20					NG12A～B
第15層	灰(7.5Y4/1)～オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土質シルト	10~30	根跡顯著	平安神宮～横大路火山灰層	NG12C～13	NG15	NG12C～13
第16層	灰色(10Y4/1)シルト	5~20					NG15
第17層	黒褐色(2.5Y3/1)シルト	10~20	根跡顯著	←流路 ▽倒木痕	後期旧石器～繩文	NG15	NG15
第18層	灰色(5Y6/1)シルト	≤20					NG15

凡例 ←上面検出遺構 ▽層中遺構

第18層：層厚約20cmの灰色シルト層である。

2) 各層出土の遺物(図7～10、図版7～9)

i) 第1層出土遺物

肥前陶器鉢1は内面に呉須で細い曲線を描く。近代のものと思われる。土師器皿7は平らな底部から低い体部が斜めに伸びる。体部にヨコナデ、底部内面にナデを加える。14世紀のものであろう。土師器把手8は古代のもので、平たい舌状の粘土板を弧を描くように曲げている。本層は近代以降に形成されたと考えられる。

ii) 第2層出土遺物

肥前磁器が多数を占める。肥前磁器をまず取上げる。碗2は直径は小さく、外面に草文のコンニャク印判を押す。IV期前半に属する。碗3は二重の網目文を描き、IV期前半と思われる。碗4は外面に半円の内に竹の葉文を、内面に四方櫛文を描き、IV期後半に位置する。碗5は外面に竹文を描き、内面に2本の圈線を巡らす。III期のものであろう。碗6は見込みを蛇の目釉ハギし、高台壘付けは露胎である。体部下端と高台外面に圈線を多用する。IV期と考えられる。碗9は体部外面に格子状に井桁文

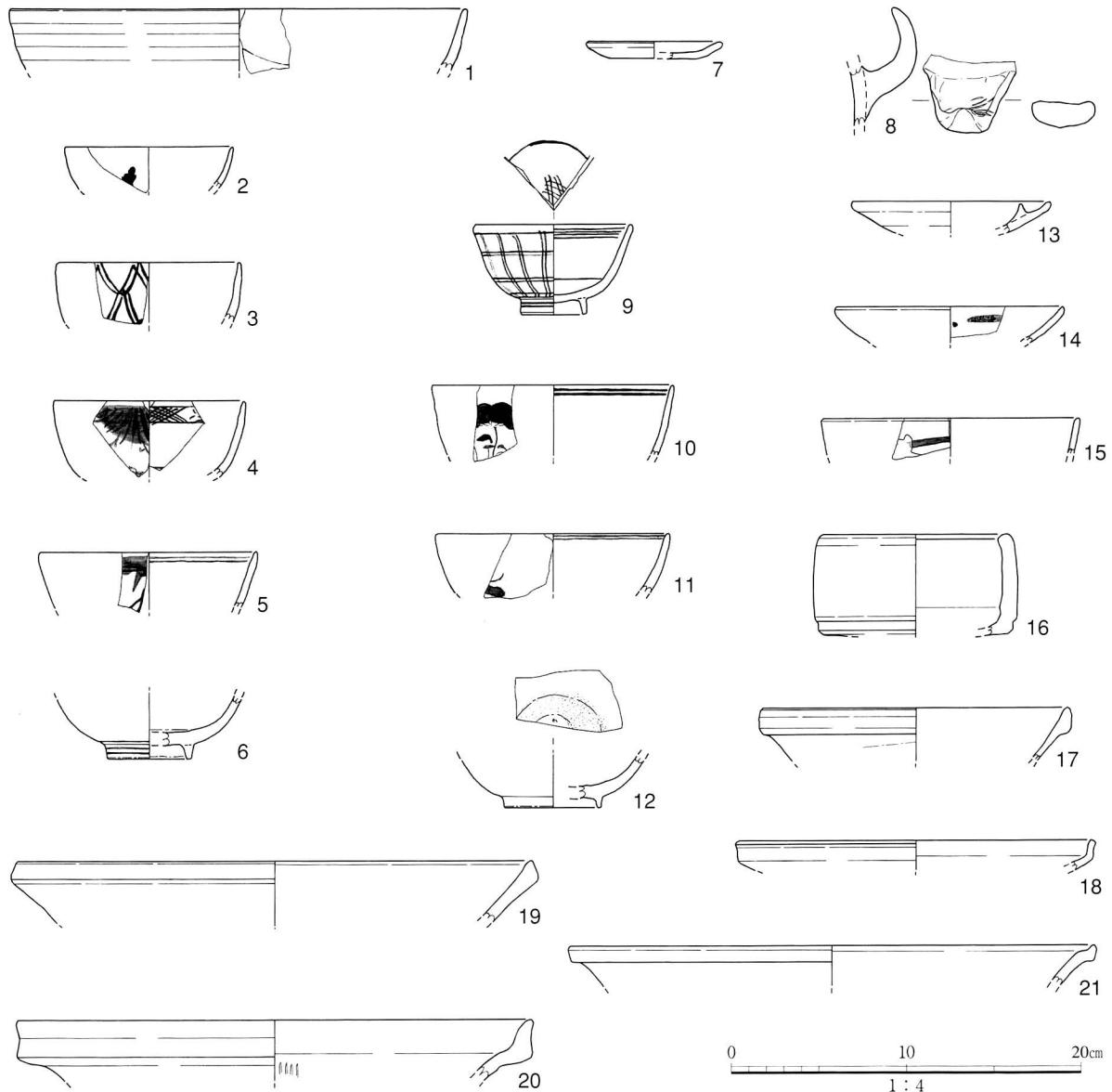


図7 第1・2層出土遺物

第1層(1・7・8)、第2層(2～6・9～21)

を、内面口縁部下に井桁の連続文、見込みに井桁を一つ描く。波佐見の製品で、V期に属すると思われる。碗10は外面に花卉文を、内面口縁下に圈線を2本描き、III期に属する。碗11は外面に草花文の一部と思われるものを、内面口縁下に圈線を2本描く。III期のものである。白磁碗12は見込みを蛇の目釉ハギし、細かい白色砂が付着している。IV期に位置する。皿14は内面に褐釉で絵付けしている。IV期と思われる。碗15は体部外面に絵付けしているが、時期は不明である。

肥前陶器碗18は口縁部を直立させた後、小さく端反りさせたもので、灰釉を施す。IV期と考えられる。唐津焼皿21は口縁先端を上方へ折り返し、灰釉を施した後、口縁部外面から内面にかけて白化粧する。III期に属する。

関西陶器の灯明受け皿13は、口縁部外面から内面全体にかけて灰色の釉を施している。18～19世紀に位置する。備前焼建水16は直径11.4cmを測る。時期は限定できない。備前焼擂鉢20は口縁部を

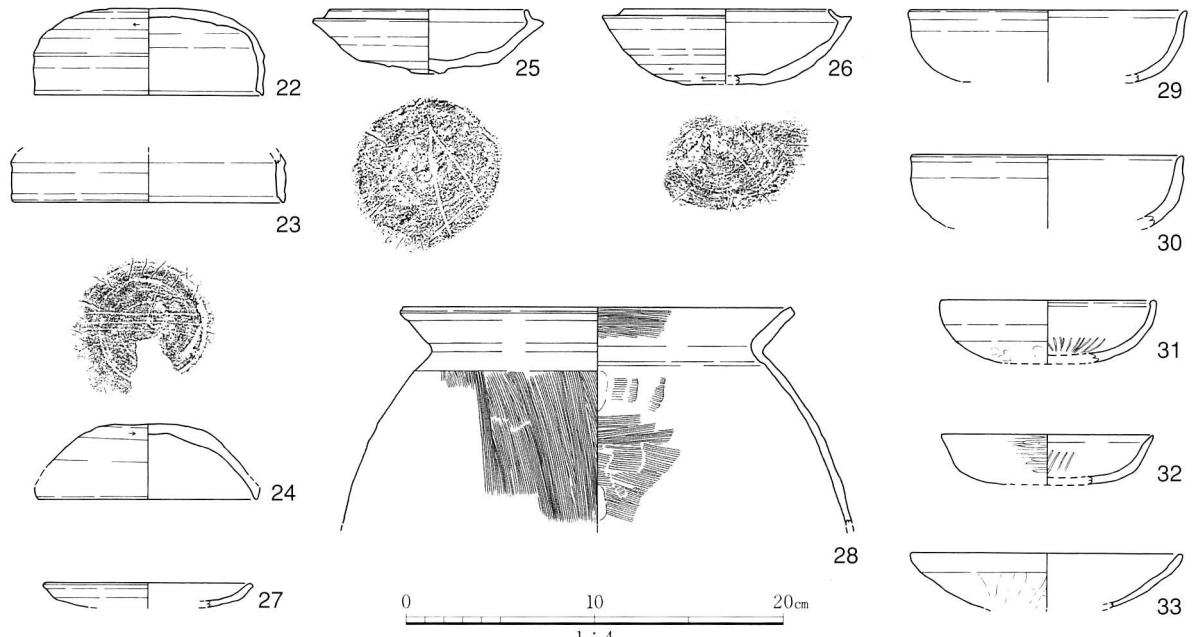


図8 第6c・7層出土遺物

第6c層(24・27・28~33)、第7層(22・23・25・26)

小さく外反させる。15世紀代と思われる。

中世の遺物としては、玉縁をもつ白磁碗17は、体部外面中途から内面にかけて施釉し、12世紀と考えられる。東播系須恵器捏鉢19は12世紀末頃と思われる。本層の時期は19世紀中葉を上限とする。

iii) 第6c層出土遺物

須恵器杯蓋24は天井部に平行3本線のヘラ記号をもつ。TK217型式である。以下は土師器である。皿27は復元器高1.7cmほどの浅いもので、やや端反り気味の口縁端部は水平に平らにおさめる。平城宮Vの皿Cと思われる。甕28は口径よりも体部が大きく張り出し、器壁は薄く、外面はナナメ方向のハケ、内面はヨコ方向のハケで調整し、口縁部外面にはヨコナデを加える。均整のとれたプロポーションから飛鳥時代の甕とみられる。椀29・30は平城宮IIIの椀Cである。杯31は底部内面に放射状の暗文がある。飛鳥IIIの杯Cに該当すると思われる。杯32は体部内面に放射状の暗文、外面にヨコ方向の暗文があり、飛鳥IIIの杯Cに該当すると思われる。椀33は平城宮VIの椀A Iと考えられる。本層の時期は8世紀末葉を上限とする。

iv) 第7層出土遺物

須恵器杯蓋22は体部に比して天井部が高く、外面のヘラケズリは反時計回りである。TK47型式に属すると考えられる。杯蓋23は復元口径14.5cmと大きい。杯身25は底部に粘土小塊が付着しヘラ起し後、未調整である。底部に「A」に似たヘラ記号を施す。TK217型式である。杯身26は底部までていねいなヘラケズリを施し、底部外面に2本の平行線によるヘラ記号が見られる。TK217型式である。本層の時期は7世紀中葉を上限とする。

v) 第8層出土遺物

須恵器杯蓋34は天井部にていねいな時計回りのヘラケズリが施し、口縁端部は平らな面をなす。TK216型式で、本報告書では蓋とするが、口縁部が内傾してすぼまり、天井部外面に重ね焼きした痕

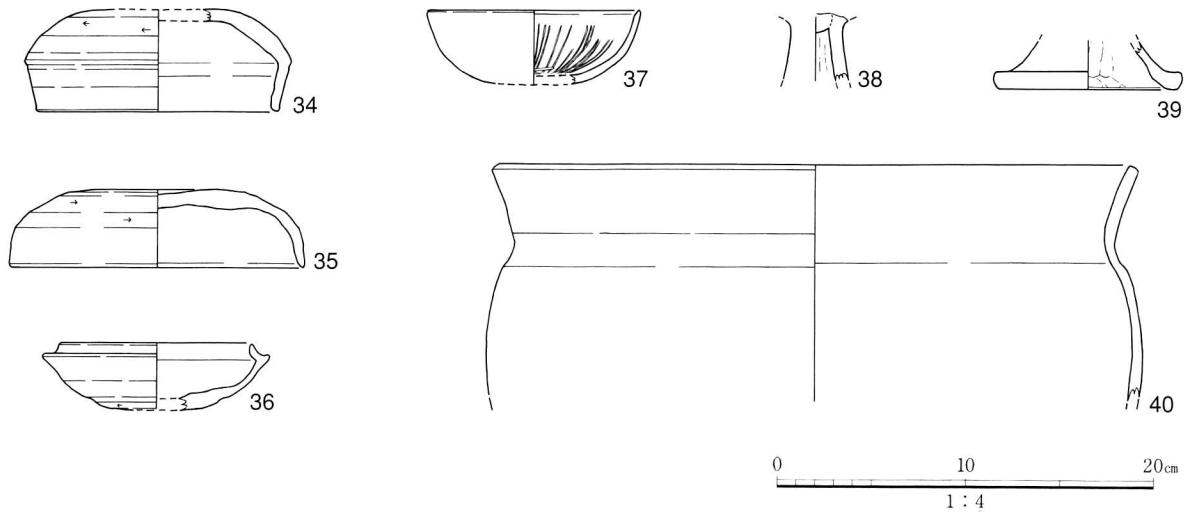


図9 第8～11層出土遺物

第8層(34・35・37)、第9層(36・38)、第10層(39)、第11層(40)

跡が残ることから、杯身の可能性も残っている。杯蓋35は体部と天井部の境の稜をもたない。ヘラケズリは反時計回りで、MT85～TK43型式である。

土師器杯37は体部内面に放射状の暗文をもつ。飛鳥I(新)の杯Cに該当すると思われる。本層の時期は7世紀中葉を上限とする。

vi) 第9層出土遺物

須恵器杯身36は底部までていねいなヘラケズリを施す。TK217型式でも飛鳥II(古)に相当する。土師器高杯38は脚部の破片である。7世紀中葉に近い前半のものであろう。

vii) 第10層出土遺物

弥生土器39は高杯脚部の破片と思われ、脚端部を肥厚させている。生駒西麓産で畿内第Ⅲ様式である。石器遺物44はサヌカイト製の横形剥片で、表裏両面とも同一方向からの剥離面を有する。本層の時期は弥生時代中期である。

viii) 第11層出土遺物

縄文土器甕40は口縁部を約5cmにわたって外反させヨコナデを加えた縄文時代晩期の甕で、滋賀里Ⅲ式に属すると思われる。本層の時期は弥生時代前期頃を上限とする。

ix) 第12a層出土遺物

底部42は生駒西麓産で、弥生土器である。本層の形

成は縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられる。

x) 第13層出土遺物

長原式土器片41は、口縁端部に突帯を貼付ける。突帯の上・下面をつまみナデ調整した上で、D字のキザミメを施す。生駒西麓産の胎土である。

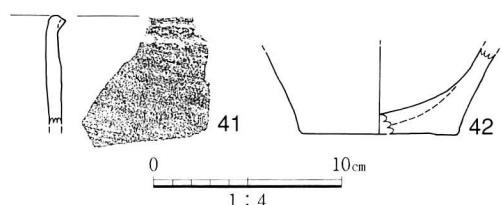


図10 第12a・13層出土遺物

第12a層(42)、第13層(41)

3) 縄文時代以前の遺構

i) 第16層上面遺構(図11、図版2・3)

NR1601 南東-北西方向に流れる幅0.4~0.9m、深さ0.2~0.5mの自然流路で、流木が出土した。

SX1601~1607 調査地の南西部に分布する長辺が0.4~1.6m、短辺が0.3~0.6mの楕円形から不整円形を呈する土壙群で、深さは0.2~0.4mを測る。遺物が出土せず、周囲に横方向に根をはった痕跡があることから、倒木痕と考えられる。埋土は黒~黒褐色シルトである。

4) 弓生時代の遺構と遺物(図11~15、図版3~5・7)

i) 第12a層上面検出遺構

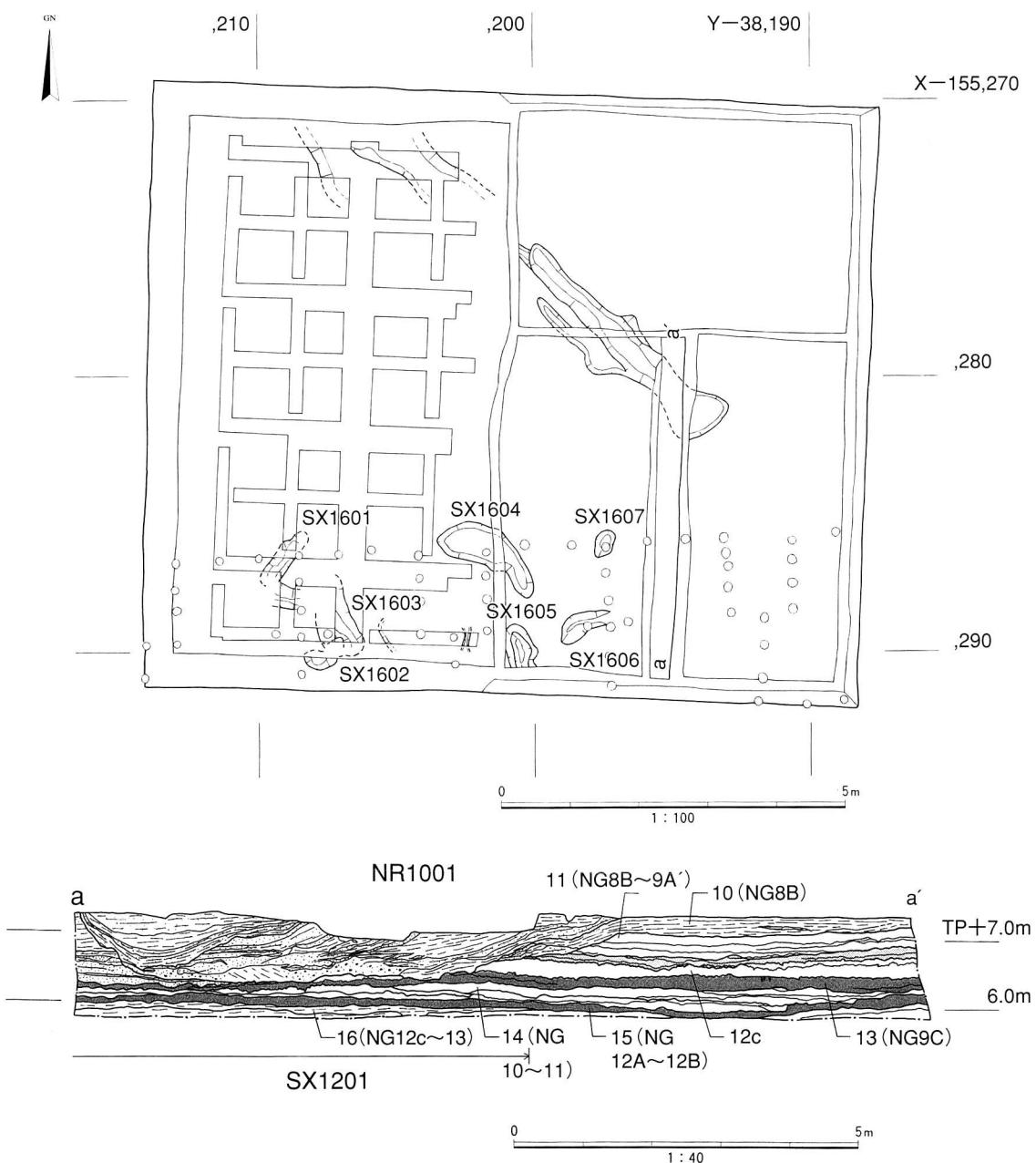


図11 第16層上面検出遺構とNR1001断面

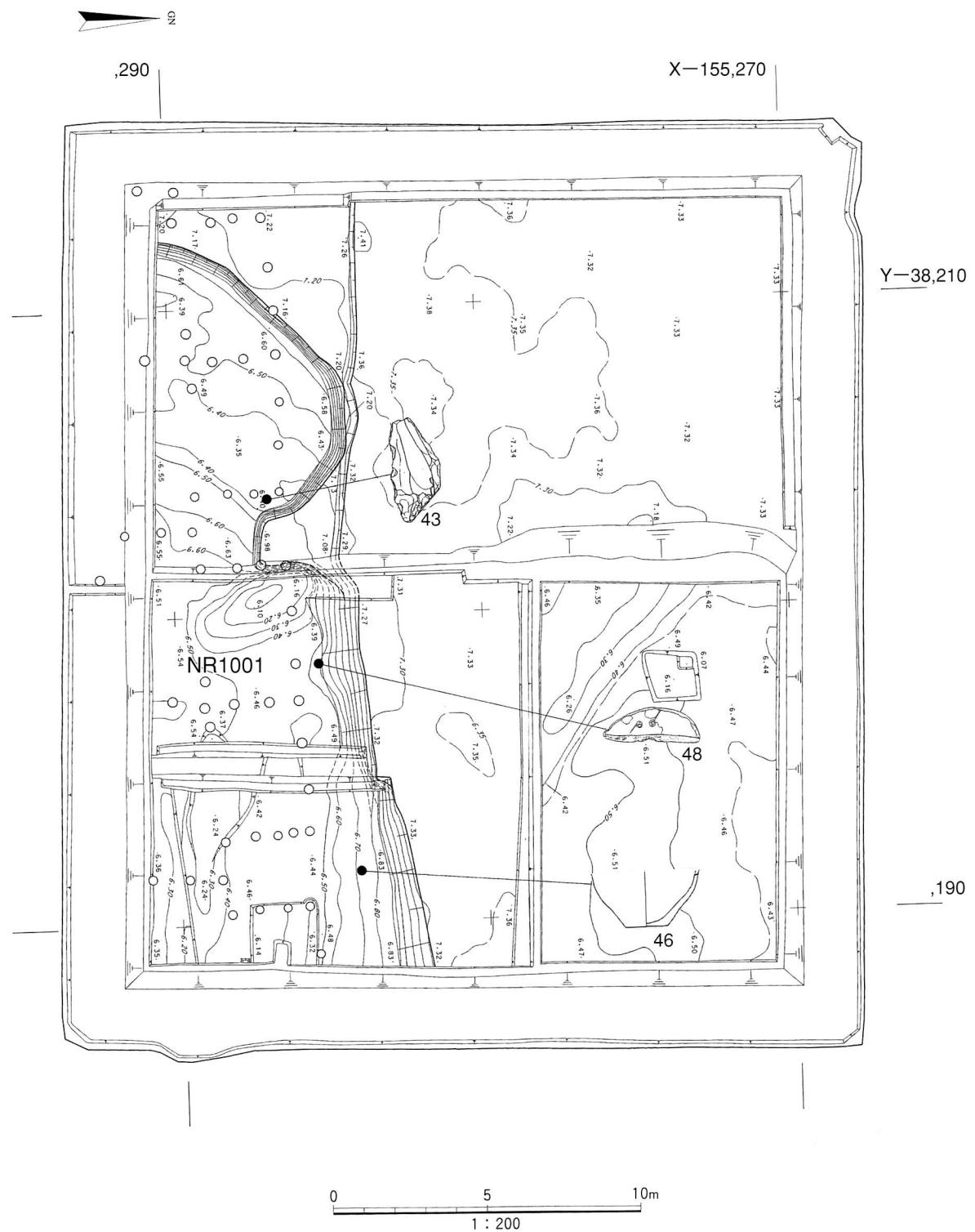


図12 NR1001と遺物出土状況

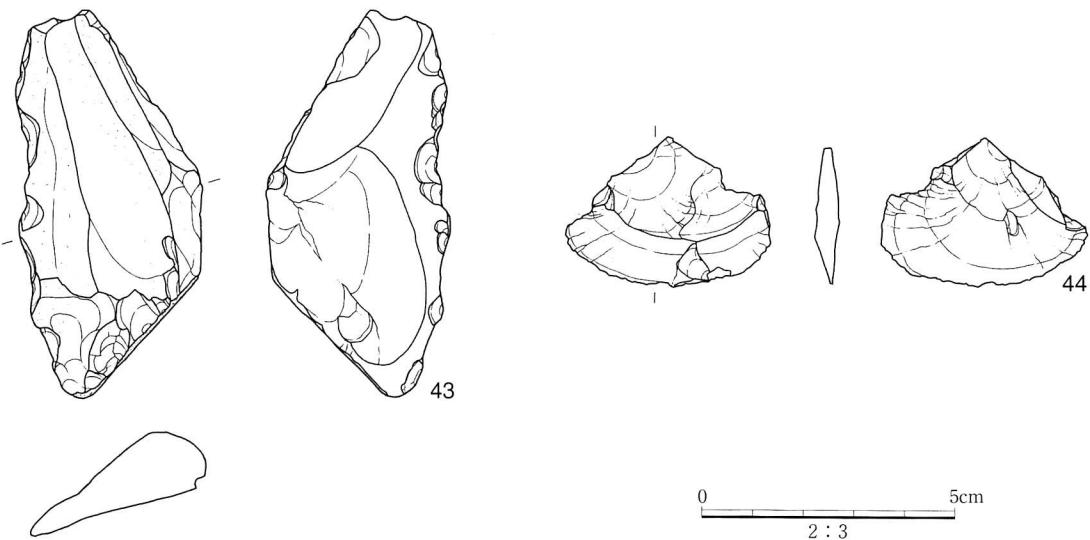


図13 石器遺物

NR1001床面(43)、第10層(44)

SX1201 調査地南端で東西24.5m以上、南北8.5m以上、深さ1.0mの不整形の落込みで、水成層である第11層が調査区全域に均等な厚さで堆積するが、本落込み内は植物遺体が多く含まれる。SX1201の位置はNR1001とほぼ重複する。NR1001内に堆積した水成の砂層は、SX1201存在時に堆積した可能性も残る。

ii) 第10層上面検出遺構

NR1001 調査区南半部にあり、東で北に振る方向をもつ幅10m以上、深さ1.2mの東西方向の自然流路で、粗粒砂～粘土質シルトの水成層で埋没している。本流路内の埋土は複数回の切合いをみせている。弥生土器や石庖丁が北肩近くの埋土上部層で出土した。

iii) NR1001出土の遺物

長原式土器片45は、口縁端部に突帯を貼付ける。突帯の上・下面をつまみ、ナデ調整した上で、D字のキザミメを施している。生駒西麓産の胎土である。

底部46・47は 弥生土器片で、46は内外面ともにていね

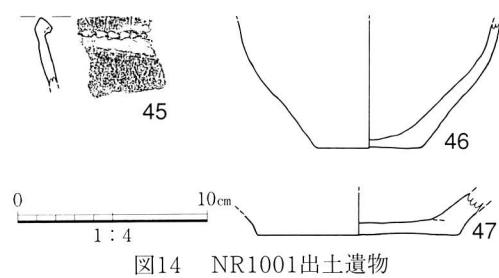


図14 NR1001出土遺物

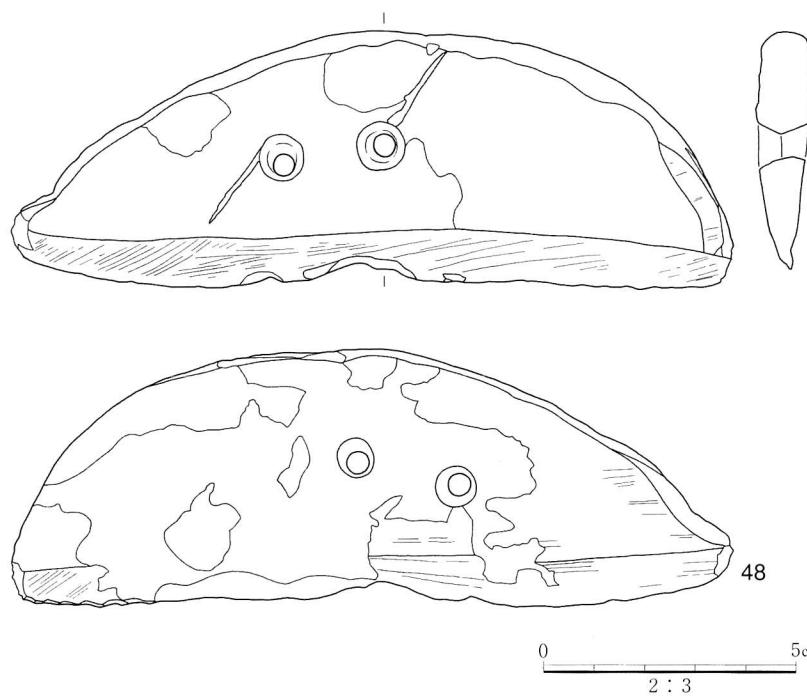


図15 NR1001出土石庖丁

いなナデ調整を加える。47は生駒西麓産で、内面が黒く変色している。

石庖丁48は緑色片岩製で、刃部の形態は直線となり、背部の形態は下向きの半月形で、左右は非対

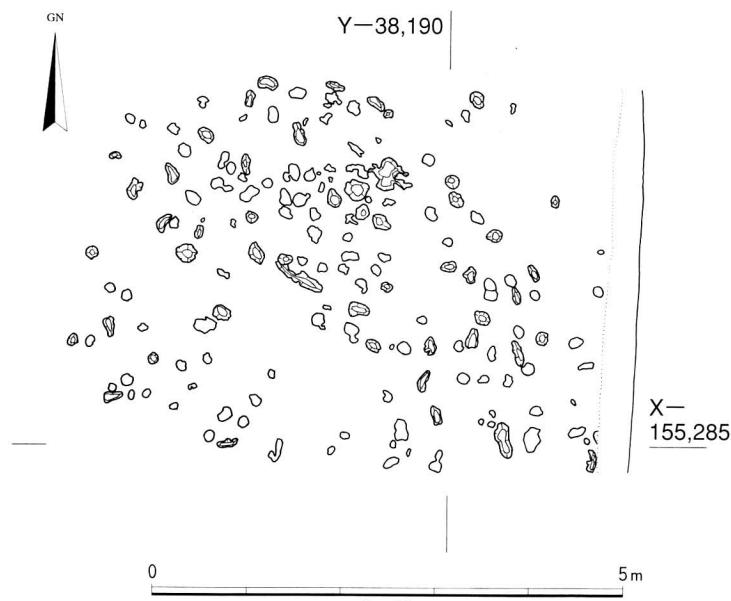


図16 第5層上面足跡

称形である。背部に溝状の傷が見られることがあることから、擦り切り技法によつて背部を切り離したものと思われる。また、裏面は剥離が顕著である。穿孔は器面の両側から行っている。表面で見て右側の孔から右斜め上方向に紐を付けたと思われる溝状の擦過痕がある。背部の形態が下向きの半月形のものは、近畿地方では中期に盛行する[酒井龍一1974]とさされている。

NR1001の床面から出土したサヌ

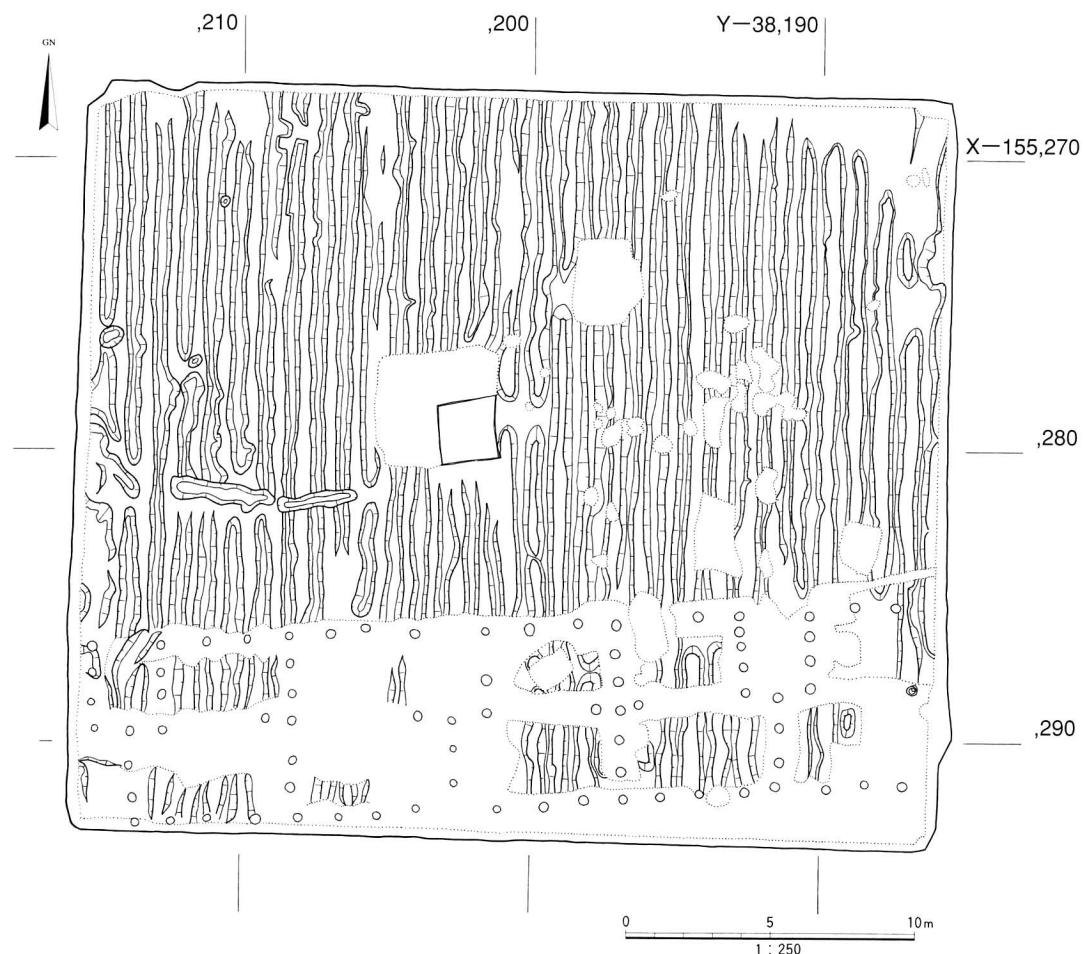


図17 第1層上面畳

カイト製スクレイパー43はローリングを受けて磨滅している。NR1001の上流から運ばれて来たものと思われる。縄文時代の石器の可能性がある。NR1001は弥生時代中期頃の流路と考えられる。

5) 中世以降の遺構(図16・17、図版6)

i) 鎌倉時代の踏込み

洪水層の第4層を除去すると第5層上面に現われる踏込みで、南東部で顕著に見られた。人と偶蹄類の足跡が確認され、南東-北西方向へ行き来したようすがうかがえる。

ii) 近代の畠

昭和36年の市営住宅建設工事直前の第1層上面の畠で、南北方向の畠が確認された。調査地南部は市営住宅建設時のシートパイル打込みの際、部分的に破壊されているが、畠幅0.5~0.7m、畠間溝0.3~0.5mの畠が調査区全域に広がっていた。調査地中央の一辺2mの方形木組みは、市営住宅の浄化槽である。

6) 小結

今回の調査ではNR1001のほかは全般に遺構・遺物は過疎であった。当調査地は北方30mに00-11次調査地[大阪市文化財協会2002a]、西方80mに96-103次調査地[大阪市文化財協会1997]、南方120mに82-26次調査地[大阪市文化財協会1982b]があるなど、調査の進んだ地域である(図4参照)。周辺の調査成果から当地の各時代の様相を概観した。

00-11次と96-103次で共通するのは、前者では長原12C~13層で、後者では長原12A~13C層で石器遺物が密集して確認されたことである。前者はナイフ形石器を含む後期旧石器最末期の石器群で、後者はサヌカイト製のチップがほとんどだが、剥片や石鏃・石匙を含み、縄文時代に属するものと推測される。両調査地の層上面の標高は、00-11次の長原12C~13層がTP+5.9m、96-103次の長原12A~13C層が高所でTP+6.3mであるのに対して、当調査地は第15層(長原12A~B層)がTP+6.4m、第16層(長原12C~13層)がTP+6.2mとむしろ高いぐらいである。当調査地が低湿地ゆえに生活の場に選ばれなかったのではなく、別の要因で生活の場に選ばれなかったと考えられる。

弥生時代の遺構としては、00-11次で中期前葉(=畿内第II様式)の遺物を含む南東-北西方向の幅約5mの溝が、96-103次で長原8B層下面から幅0.3~1.1mの数条の溝が検出された。82-26次では長原8層下面で南北方向の自然流路が見つかったが、これは今回のNR1001と一連のものになる可能性があると考えられる(第IV章参照)。00-11次の花粉分析結果から、周辺での水田耕作は弥生時代中期前半以降と考えられる。

当調査地で第10層(長原8B層)直上に第9層(長原7A層)がのるという不整合が生起している。しかし、周辺では長原7B~8A層に関連する遺構が見つかっている。すなわち、00-11次では長原8A層上面で南北方向の幅約9m、深さ約0.5mの溝が検出され、土師器・韓式系土器・須恵器のほか、鉄製品・石製模造品・木製品・動物骨が出土した。96-103次では長原7A層下面で南東-北西に延びる溝や東西方向の溝が確認されている。

当調査地の第9層上面では遺構は見られなかったが、00-11次では長原7A層上面で、南側の水田域と北側の流水域を分ける飛鳥時代前半の堤防遺構と考えられるSX701が検出されている。南東-北西の方位をとり、杭を4列平行して打込む幅約5mの浅い溝状の凹みをもち、土器類・鉄製品・木製品・石製品・動物骨が出土した。96-103次では同層上面で水田畦畔が見つかっている。また、当調査地では確認されなかったが、00-11次では6世紀前半から7世紀前半の間に起ったと考えられる地震痕跡が検出された。それは長原9C層が東から西に向って落込み、長原10~11層の砂礫が長原9C層を切って吹き出す、いわゆる噴砂現象が観察され、長原7A層より上位では地震による地層の乱れがないことから、地震は長原7A層の堆積以前と判断された。

第6a~c層(長原4B~6Ai層)は層理面の変形や攪拌された状況などから作土層と思われるが、上位層の耕作のため畦畔や溝などの遺構は見られなかった。その状態は00-11次、96-103次とも共通する。

第5層上面の踏込みは、00-11次検出の長原4A下部層上から踏込まれ、長原4A上部層で覆われている足跡群の状況に似ていることから、第5層は長原4A層に相当する可能性がある。

第Ⅲ章第2節で見るよう、中世末以降、当地は字「五反地」、00-11次は「丁地」、82-26次は「六ツ坪」、96-103次は「六反地」と呼ばれ、「六反地」以外は六反村域であり、すべての調査の長原2層は作土層である。

当地周辺の各時期を総括すると、後期旧石器から縄文時代にかけては石器遺物が確認されるなど生活の場であったのが、弥生から古墳時代にかけては、周辺の95-36次や89-86次に代表される北西の地域に比して、顕著な人間活動は想定できず、古代から中世にかけては広い範囲で耕作の痕跡が確認され、近世以降は継続的に耕作されたと考えられる。

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

第1節 NG01-32次調査地における花粉分析(中間報告)

大阪市立大学大学院理学研究科 松江実千代

1)はじめに

長原遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、大阪市東南部の瓜破台地の東半分とその北東に拡がる沖積地に位置する。今回、東地区NG01-32次調査地(図18)で飛鳥時代から現代までの地層から採取した試料の花粉分析を行い、当遺跡周辺の古植生に与えた人為的な影響および農耕の痕跡などについて検討した。

2)試料について

試料はNG01-32次調査地の北壁から採取した(図19)。堆積物の層相は図20の柱状図に示した。地層名は第Ⅱ章第2節に拠ったが、細分した地層については、i・iiを付した。堆積物の年代は含まれる遺物や長原遺跡の標準層序[趙哲済2001]に基づく発掘担当者の見解に従った。

3)分析方法

i)試料の処理

花粉化石の分離処理は下記の手順で行い、プレパラートを作成した。

(1)試料の湿潤重量を秤量し、10%水酸化カリウム水溶液に浸し、室温で2日間静置。

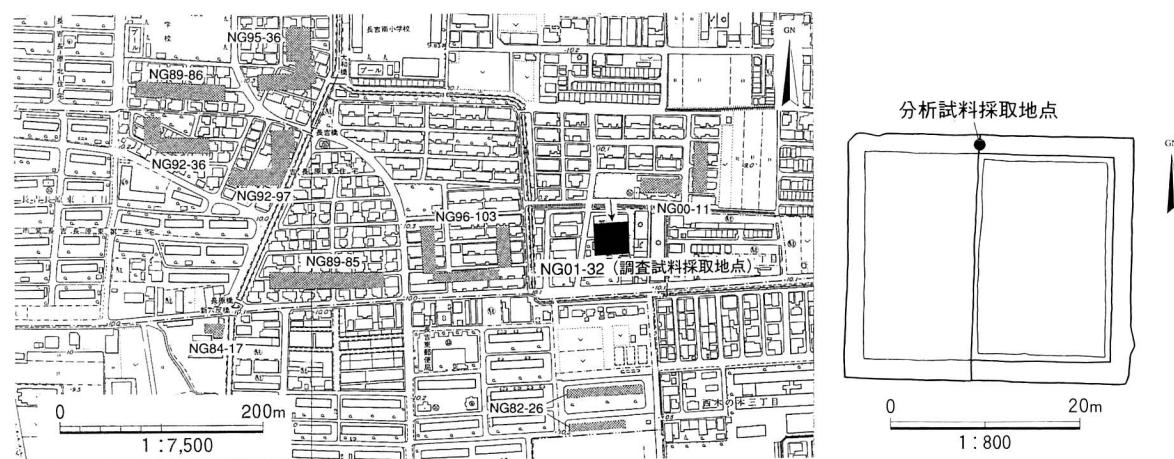


図18 NG01-32次調査 試料採取位置図

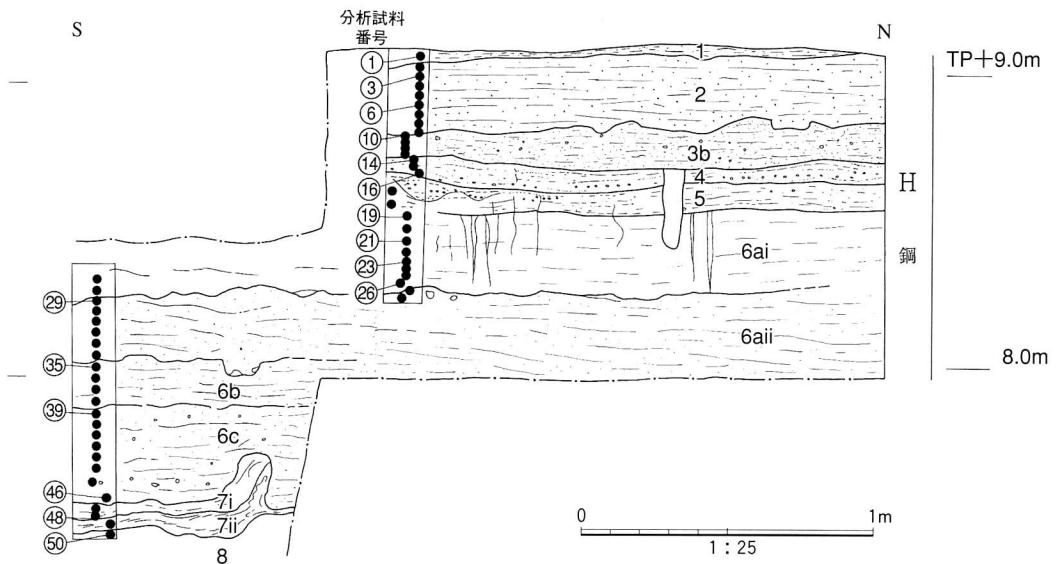


図19 北壁の分析試料採取層準

- (2)泥化しながら粗粒碎屑物、植物片を篩別除去。
- (3)傾瀉法水洗による粘土およびフミン酸の除去。
- (4)蒸発皿を用いたスワーリング分離法により砂粒・シルト粒の除去。
- (5)重液(塩化亜鉛飽和水溶液)による比重分離(800r.p.m.で10分間その後2,000r.p.m.で10分間遠心分離)を2回。水洗。
- (6)46~48%フッ化水素酸処理(室温で24時間静置)。
- (7)水洗後、氷酢酸に置換。
- (8)アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸=体積比9:1の混合液；1分間湯煎)。
- (9)氷酢酸に置換後、水洗。
- (10)最終的に残存したもの(花粉化石を含む)に封入剤のグリセリンジェリーを入れ、よく攪拌した後マイクロピペットを用いスライドグラスに滴下しカバーガラスをかける。
- (11)ネイルエナメルでカバーガラスの周囲を密封。

ii) 花粉化石の同定と統計処理

花粉化石の同定は光学顕微鏡を用い400倍または1,000倍の鏡下で、木本植物の花粉化石の総数が250個を超えるまで計数し、その過程で出現する草本植物の花粉化石やシダ・コケ植物の胞子化石の同定・計数も行った。同定・計数が終了した後、プレパラートを前面にわたって検鏡し、計数時に出現しなかった分類群も記録した。

各分類群の出現率は、木本花粉、草本花粉、シダ・コケ植物の胞子とともに木本植物の花粉総数を基数として算出した。

4) 分析結果

分析したすべての試料から統計処理が可能な粒数の花粉・胞子化石が得られた。おもな分類群の産出率の変化を花粉ダイアグラム(図20)に、産出頻度の低い分類群の産出率を表2に示した。異なる分

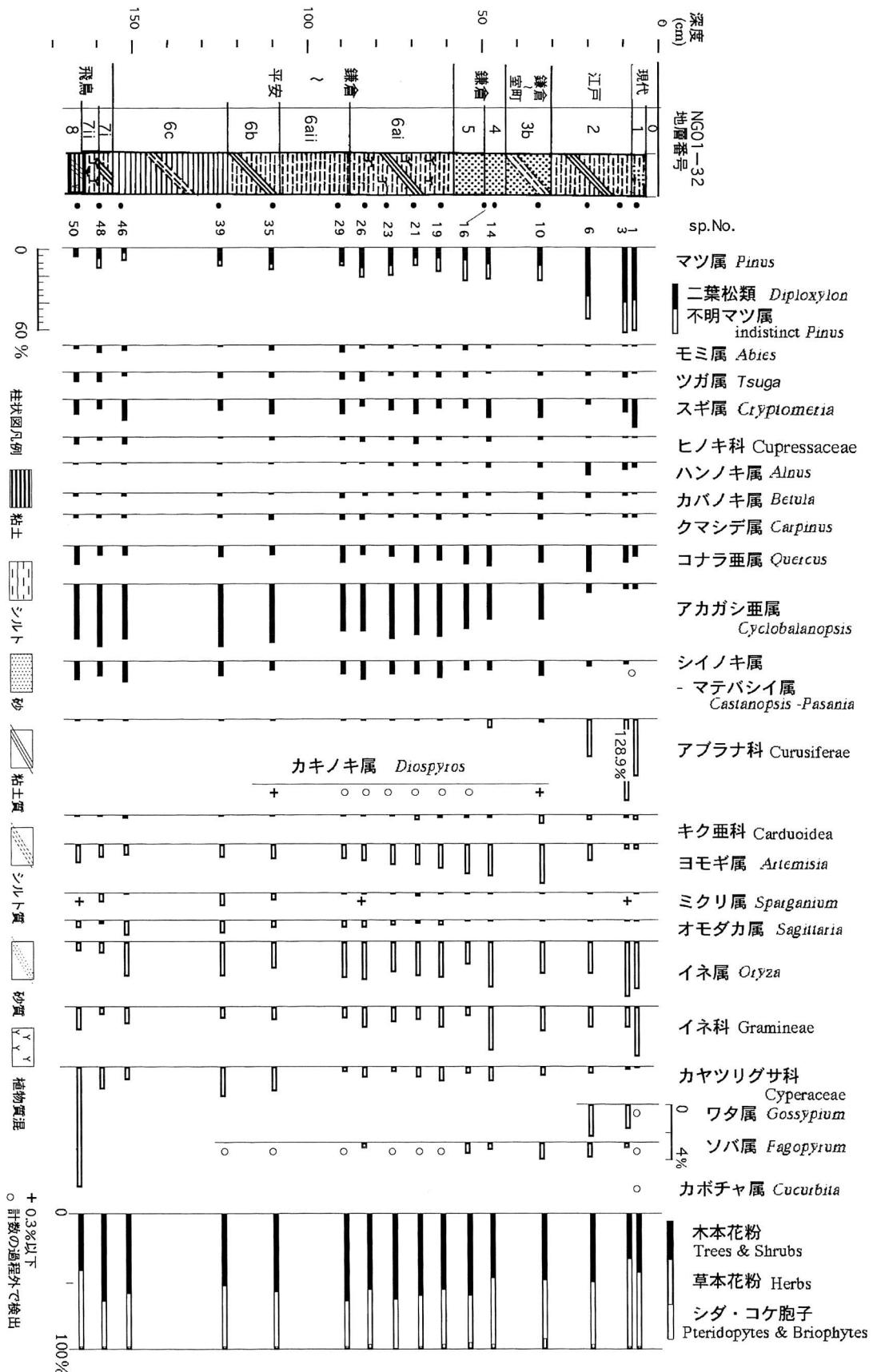


図20 NG01-32次 花粉ダイアグラム

表2 産出頻度の低い花粉・胞子分類群

○：計数の過程外で検出

单位：%

表2 産出頻度の低い花粉・胞子分類群(続き)

																				Sample No.
50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ワレモコウ属 <i>Sanguisorba</i>	
48	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ヒシ属 <i>Trapa</i>	
46	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	アリノトウグサ属 <i>Haloragis</i>	
40	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	セリ科 <i>Umbelliferae</i>	
39	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ヒルガオ属 <i>Calystegia</i>	
35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	シソ科 <i>Labiatae</i>	
29	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ミズユキノシタ属 <i>Ludwigia</i>	
26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	キツネノマゴ属 <i>Justicia</i>	
23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	オミナエシ属 <i>Patrinia</i>	
18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ツリガネニンジン属 <i>Adenophora</i>	
13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	タンポポ亜科 <i>Cichorioideae</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	オナモミ属 <i>Xanthium</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ガマ属 <i>Typha</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	サジオモダカ属 <i>Alisma</i>	
0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ツユクサ属 <i>Commelinaceae</i>	
1.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	イボクサ属 <i>Aneilema</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	キスゲ属 <i>Hemerocallis</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	トウゲシバ亜属 <i>Urostachys</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ヒカゲノカズラ亜属 <i>Lycopodium</i>	
0.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	イノモトソウ科 <i>Pteridaceae</i>	
0.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ミズワラビ <i>Ceratopteris thalictroides</i>	
0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	シノブ属 <i>Davallia</i>	
0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	オシダ科-チャセンシダ科 <i>Aspidaceae-Aspleniaceae</i>	
0.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ノキシノブ属 <i>Lepisorus</i>	
0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ウラボシ科 <i>Polypodiaceae</i>	
0	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	-	-	○	○	-	-	-	-	デンジソウ <i>Marsilea quadrifolia</i>	
-	-	○	○	○	○	0.4	○	○	0.3	○	0.6	-	-	1.1	1.7	0.3	0.3	-	サンショウモ <i>Salvinia natans</i>	
-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	0.4	0.4	1.5	-	苔類胞子 <i>Hepaticae</i>	
-	-	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.3	0.3	0.6	-	单条口胞子 <i>monolet spores</i>	
-	-	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.13	-	-	-	三条口胞子 <i>trilete spores</i>	

○：計数の過程外で検出

单位：%

類群でありながら花粉形態による識別が困難なものは分類群名をハイフン(-)で結んで表示した。

また、*Pinus*(マツ属)のうち亜属段階の識別に必要なgerminal zone(発芽ゾーン)の表面模様が観察できず、*Diploxyylon*(複維管束亜属、二葉松類)と*Haploxyylon*(単維管束亜属、五葉松類)のいずれであるか決定できなかったものはindistinct *Pinus*(不明マツ属)として表示した。

5) 考察

Nos.50~19(第7層、第6層)の時代の古植生[飛鳥～鎌倉時代]

木本花粉のうちコナラ属アカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)が高率に出現し、ついでシイノキ属ーマテバシイ属(*Castanopsis-Pasania*)も多いことから、周辺の森林植生は基本的にはカシ林を主体とする暖温帶常緑広葉樹林(照葉樹林)であったといえる。スギ(*Cryptomeria japonica*)のほかに低率ながらツガ属(*Tsuga*)やモミ属(*Abies*)も産出することから、後背山地にはスギをはじめツガ属、モミ属などの中間温帯林要素も存在していたと考えられる。

草本花粉では、カヤツリグサ科(Cyperaceae)、イネ科(Gramineae)、ヨモギ属(*Artemisia*)などが多いことから周辺には草地が広がっており、挺水植物のミクリ属(*Sparganium*)、サジオモダカ属(*Alisma*)、オモダカ属(*Sagittaria*)、ガマ属(*Typha*)なども産出することから、浅い沼または湿地的な環境もあつたことが推定される。

カヤツリグサ科は特にNo50で著しく高率に出現するが、No48では急減する。しかし挺水植物全体として出現率には大きな変化がないことから、その後も湿地的な環境は維持されていたと考えられる。

イネ科のなかでもイネ属(*Oryza*)と同定される花粉はいずれの試料からも産出し、No46より上位で安定して高い出現率を保つ。史前帰化植物の一員であるオナモミ属(*Xanthium*)も伴う。また、オモダカ属、サジオモダカ属、イボクサ属(*Aneilema*)などの水田雑草として知られる花粉のほかにデンジソウ(*Marsilea quadrifolia*)、ミズワラビ(*Ceratopteris thalictroides*)、サンショウモ(*Salvinia natans*)などの水生シダ植物の胞子も伴うことを考え合わせると水田耕作が安定して営まれていたことが推定される。またソバ属(*Fagopyrum*)の花粉がNo39以降連続して出現することから、畑作としてソバの栽培も行われていた。

カキノキ属(*Diospyros*)がNo35より低率ながら連続して出現する。栽培されていたかどうかは不明だが、果実が利用されていた可能性がある。

Nos.16~10(第4層、第3層)の時代の古植生[鎌倉～室町時代]

下位の時代(Nos.50~19)にくらべ、アカガシ亜属およびシイノキ属ーマテバシイ属がやや減少傾向を見せ始めることから、森林植生への人間の影響がわずかに出始めたことが示唆される。

水田耕作およびソバの栽培が引き続き営まれていた。

Nos. 6 ~ 1 (第2層、第1層)の時代の古植生 [江戸時代～現代]

マツ属(*Pinus*)がNo 6で約52.5%に急増しNo 3およびNo 1でもさらに高率を示す。またコナラ亜属

もNo.6でやや増加する一方、アカガシ亜属およびシイノキ属-マテバシイ属は著しく減少し低率になる。これまで見られた照葉樹林に代わって、アカマツの二次林が拡大したこと示しており、当遺跡を取巻く森林植生が人間により極端な破壊を受けたことによるものであると考えられる。No.6でマツ属とともに増加するコナラ亜属はコナラの二次林の可能性がある。スギは、下位の時代(Nos.50~10)で10%前後の安定した出現をしていたがNo.6で非常に低率となる。その後、No.3およびNo.1でスギのみ増加することから、この増加はスギの植林による影響と推定される。

アブラナ科の花粉が高率に出現し、とりわけNo.3で多く産出する。花粉形態からアブラナ(*Brassica napus*または*Brassica campestris*)とは断定できないが、高率な出現から、アブラナの栽培が推定される。また、ワタ属(*Gossypium*)が産出することからワタの栽培も行われていたと考えられる。No.1では、カボチャ属(*Cucurbita*)などほかの作物も栽培していたことがうかがえる。

6)おわりに

第2層が堆積した時期(江戸時代)には、人間による著しい植生干渉のため照葉樹林がほとんど破壊されアカマツの二次林が急速に広がるなど森林植生に大きな変化があった。その時期、当遺跡周辺では、それまで営まれていた水田耕作やソバの栽培にくわえ、アブラナやワタの栽培など畑作も行われていた。

第2節 村絵図にみる河内国丹北郡六反村の景観と変化

大阪市史料調査会主任調査員 渡邊忠司

1)はじめに

日本各地で見慣れた景観が失われている。それは急激な人口の増加や産業基盤の拡大などに伴う住宅や巨大な建築物の増加、道路の新設と拡張にみられるように、目にみえる景色としてとらえられる。開発や区画整理で、否応なく旧来の宅地・耕地、入会地、用水路、生活道路など、それこそ三日見ぬ間に失われていっている。それは、以下で検討する六反(平野区長吉六反)の地域も例外ではない。ちなみに絵図10(目録番号、以下同じ。写真2)は寛政8(1796)年の六反村絵図であるが、これと現代の六反地区の航空写真を比較してみると、村域とその形状がほとんどそのまま残されていることが読みとれる。村の形状は残っているが、現在は開発が進み、耕地はいよいよ住宅地に変化している。

しかし、現在のような急激な変化とは違って、近代以前の変化は目に見えるような巨大な建築物の出現や家並みの増加ではない。それをたどる手だては、国絵図・村絵図・川絵図・用水路絵図あるいは名所絵図・風景画などの絵図・絵画類や、各地に残る遺跡・遺物および種々の記録である。特に絵図類を用いて、中世の荘園景観や近世の村の景観変化、復元の研究がすすめられ、記録・史料の裏づ

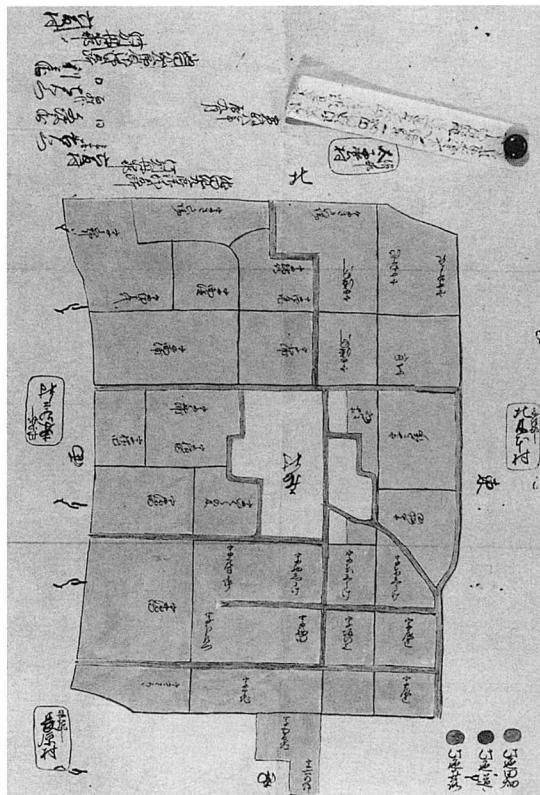


写真2 絵図10 「六反村田畠井路絵図」

寛政8(1796)年



写真3 昭和36(1961)年の六反村々域(白線内)

[国際航業撮影航空写真、☆は今回調査地]

けにとどまらず、独自の研究分野として展開している(註1)。

ここでも村絵図を用いて、六反地区の近世の景観の特色とその変化を探ってみたい。同地区は、近世の河内国丹北郡六反村を中心としているが、同村の元庄屋小枝家には村絵図を含む、近世を中心とした大量の史料が残る。当時から大阪周辺地域として、大坂三郷との関わりは深く、また現在は大阪市平野区に属し住宅地域として街路の変更や田畠の宅地化がすすんでいる。当時の村絵図を用いて形状をたどり、村絵図に記された景観の特色を探ってみよう(註2)。

2)近世検地と村域の確定

近世の村は基本的に行政村である。検地とそれに伴う兵農・商農・工農の分離と村切はそれを実体化した。古い村であれば古代・中世以来の何世代にもわたる居住の継続があり、生活と生産の共同体としての確固たる基盤があった。その歴史的な前提を踏まえて、近世の村として行政的な地域区画と境界を設定された。

六反村の検地は文禄3(1594)年と延宝7(1679)年に施行され、慶長11(1606)年には文禄検地以後の耕地所持の変化を示した写が作成されている。検地帳と明細帳によると、文禄検地が長束正家、延宝検地が本多兵部少輔によって施行され、慶長11年の写は豊臣秀頼治下に作成された。写は文禄検地以後の高持百姓(名請人)の変化が記されており、指出検地と同じ意味をもつと考えられる。それぞれの検地帳によって、85年間にわたる高持百姓の変化が確かめられる希有な村である。ただし、近世を通じて、3冊の検地帳が用いられたのではなく、

土地台帳・年貢台帳として明治4(1871)年まで機能したのは延宝検地帳だけである(註3)。

村の範囲は文禄検地のときに決められたと考えられるが、延享元(1744)年の明細帳には

一村内

東西六丁

南北十壱町

とある。これより後の宝暦10(1760)年ごろの明細帳には「当村南北七町東西六丁」あるいは「当村地境迄地境迄東西凡六町、南北凡七町」と記される。若干相違があるが、村絵図10や12(写真4)に見られるように、ほぼ長方形の村である。延享元年のそれを現在の単位にすれば、東西654m、南北1,199m、宝暦10年の記録によれば、南北は763mとなり、正方形に近い形状となる。

明細帳には隣接する東西南北の村々の居村との道のりも記されるが、これはいずれの明細帳でも大きな違いはない。それらによると、東は

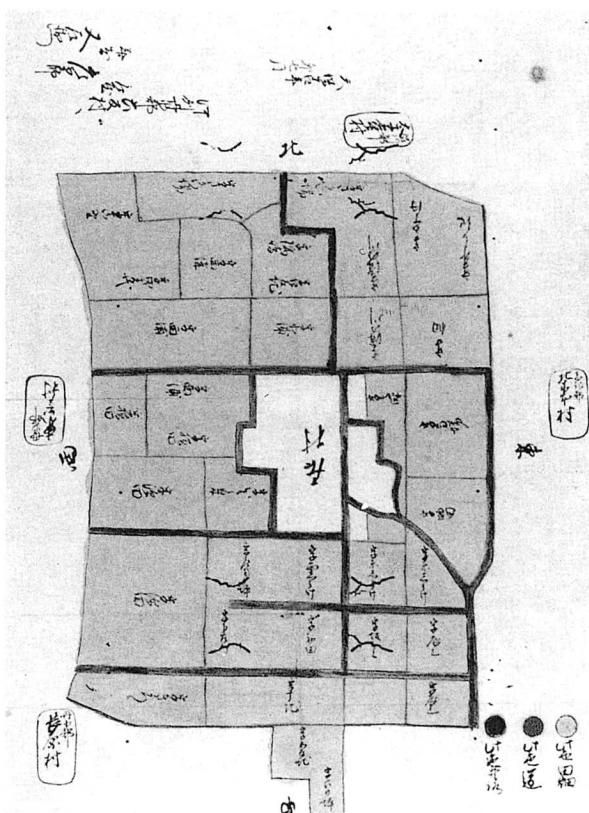


写真4 絵図12 「六反村田畠井路図」 天保14(1843)年

3町(約327m)で渋川郡六反村、西は10町(約1,090m)で丹北郡東出戸村、南は10町で丹北郡木本村、北は12町(約1,308m)で渋川郡亀井村である[絵図10および8(写真6・図21)、23(写真5)参照]。

この村域の村高は文禄検地で647石7斗2升、延宝検地で710石2斗2升4合が打ち出され、反別(面

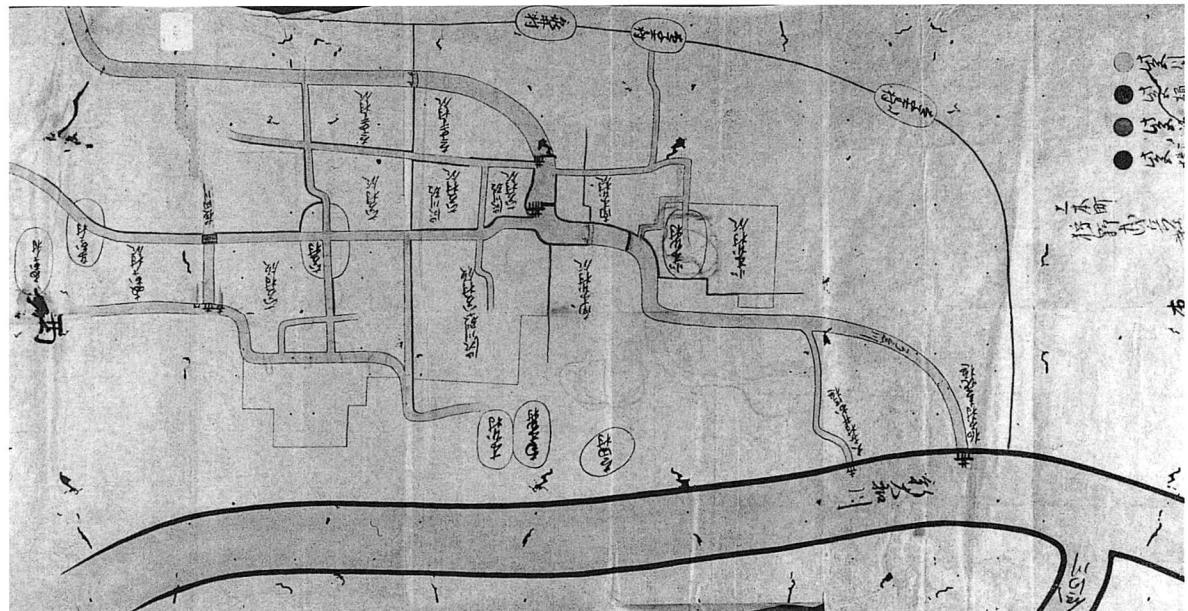


写真5 絵図23 「新大和川水利図」(年代不明)

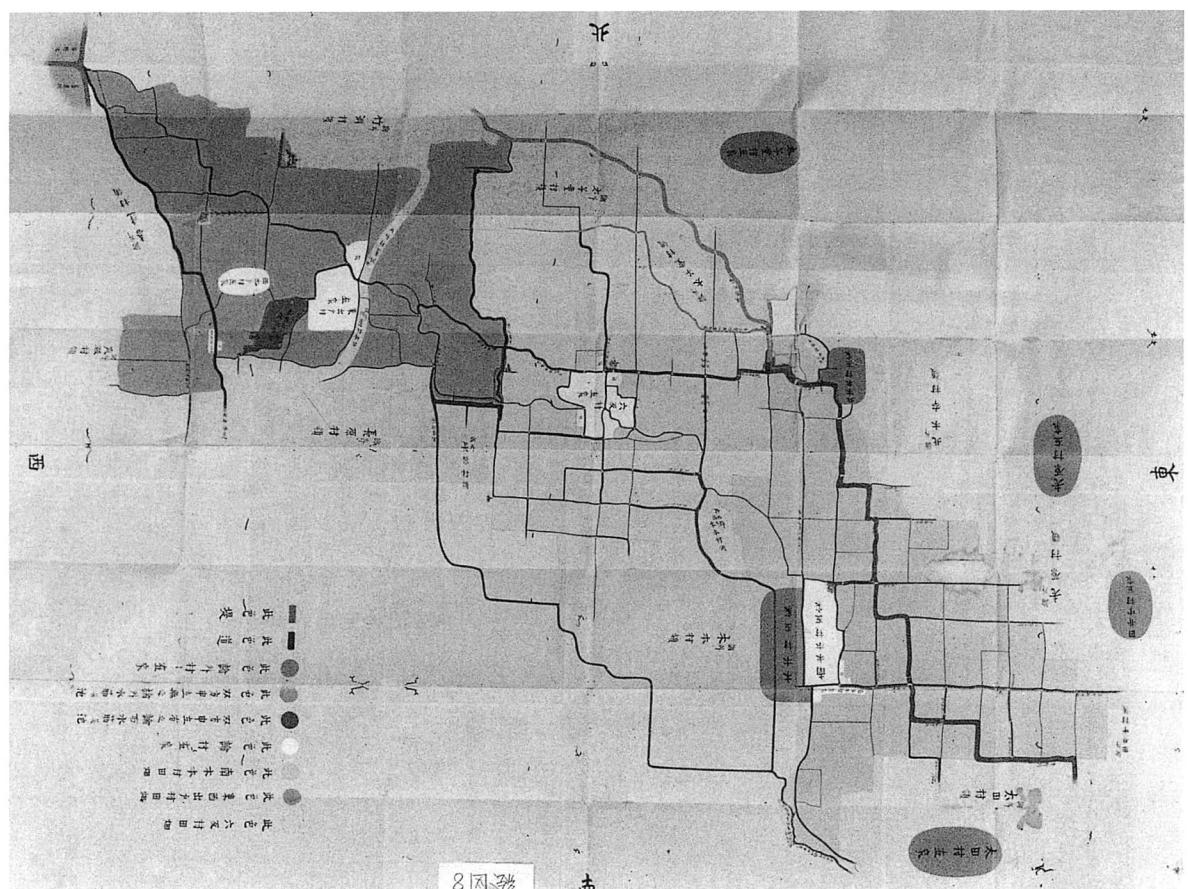


写真6 絵図8 「水論絵図」 寛政6(1794)年

(積)は文禄検地では46町1畝10歩、延宝検地では51町8反6畝28歩(約51万4,413m²、約0.5km²)が打ち出されている。石高で63石余、反別で5町8反余の増加である。このうち延宝7年の村高と反別が明治維新まで維持された。先に触れたように、現在の六反地区はこの範囲にほぼ相当している。

村は天正11(1583)年に豊臣氏領となり、六反村の近世が始まる。以後元和元(1615)年から幕領となり、その後天和3(1683)年に京都所司代稻葉氏の役知、貞享2(1685)年から再度幕領、宝永2(1705)年から武藏大多喜藩稻垣氏領、享保10(1725)年に上知、幕領に戻り、宝暦6(1756)年に大坂城代井上正経役知、明和7(1770)年に幕領、文化10(1813)年小田原藩大久保氏領へと代わり、明治維新にいたっている。

この範囲に住む人々は、延享元(1744)年には竈数(所帯数)126軒、高持43軒、無高83軒、人数556人、男261人、女295人、宝暦10年には120軒、人数564人、男256人、女308人であった。

3) 絵図にみる六反村の特色

村絵図は領主の交代による引き渡しや境界や水利に関する争論に際して、居村と耕地の位置と範囲、用水井路の流路などを一覧するために作成される。六反村の絵図も同様である。文禄から延宝にかけての村のようすを示した絵図は、残念ながら残されていない。六反村に残るもっとも古い年紀をもつ絵図は、享保11(1726)年3月の[稻垣摂津守所替之時被召六反村絵図]である(絵図1、写真7)。こ

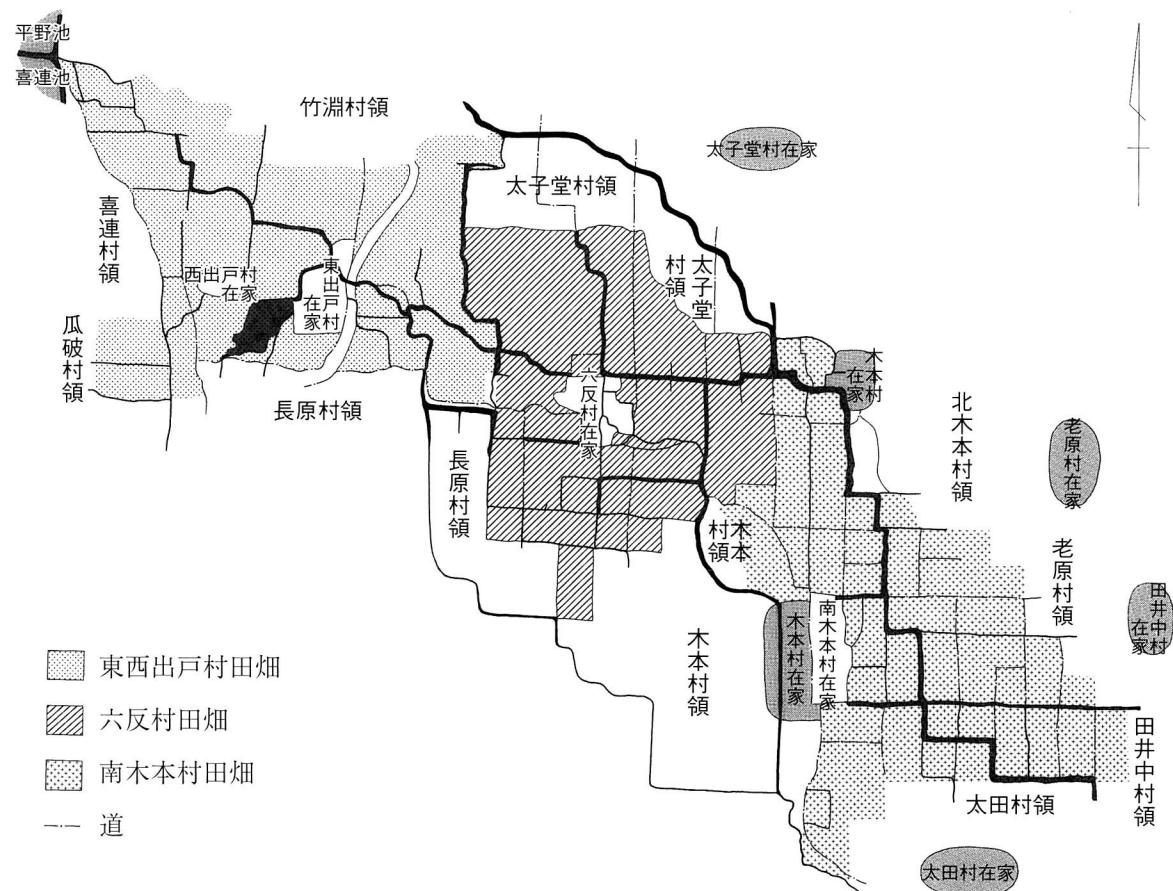


図21 絵図8のトレース図

これは六反村が武藏大多喜藩稻垣氏領から幕領(石原清左衛門代官所)となったときに作成されている。知行地の引き渡しのために作られているが、大雑把な概略図で、六反村の領域と居村の位置が描かれているだけである(註4)。

これをはじめとして、六反村には42枚の絵図が残されている。絵図群は、用水に関する水路と樋門の絵図と六反村の居村と耕地配置の絵図、六反村周辺と河内国に関する広域図に分けられる。このうち居村と耕地関係の絵図を中心に、村落景観の特色をみよう(註5)。

すべての絵図を一覧してみると、共通の特色として村の形状がまったく変化していないことがあげられる。長方形の村域、東側には新大和川から出る平野川と、西側の大乗川とに挟まれ、両河川を繋ぐように村内の用水路・悪水路が配置されている。しかも区画整理されたように水路を軸として居村と耕地が秩序よく配置され、計画的な造成を推測させる形状である。これを前提にいくつかの特色をあげてみよう。

- ①居村が村落の中心に置かれ、周辺に耕地が配置されている。
- ②水路を境にして居村と耕地地区が区分されている。
- ③耕地も計画的に造成配分されたように区画割りされている。

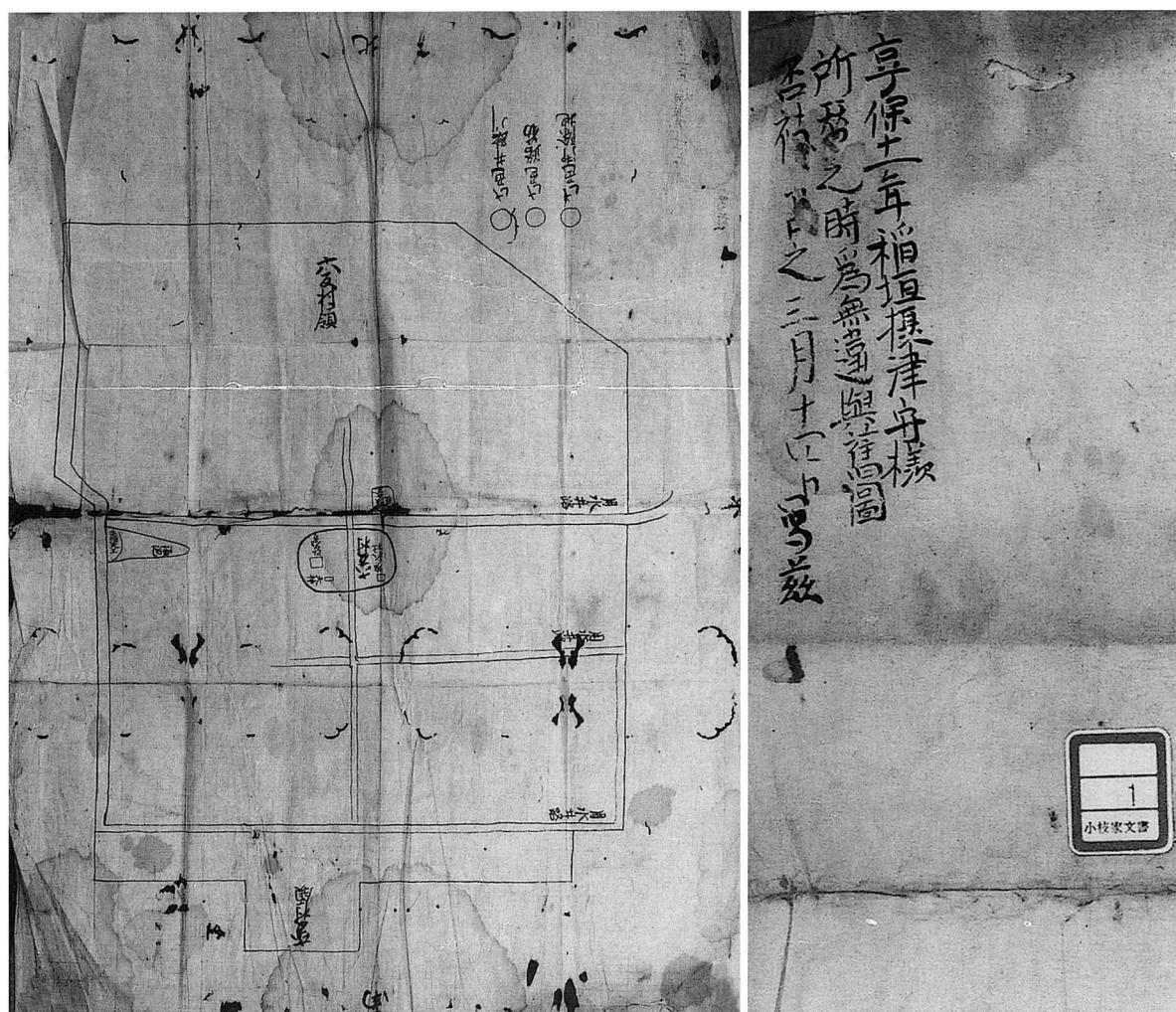


写真7 絵図1 「稻垣摂津守所替之時被召六反村絵図」 享保11(1726)年 右写真は絵図裏面

④居村は周辺に水路を巡らし、あたかも環濠集落のような集落形態をみせている。

⑤村内の大字地が水路を境に区分けされている。

⑥村の形状はほぼ長方形であるが、1個所だけ村の南端に張出し部分がある。

これらの特徴のうち、特に注目したいことは居村内および居村と村内耕地との境に、居村を取巻くように巡らされている井路である。この部分については、用水路としての意味合いよりも、環濠集落のそれと同じような防御的機能を持たせた配置と考えられることである。形態的にはすぐ近くの平野郷の環濠と類似している。絵図10(写真2)および絵図17(写真8)にはその形状を具体的に読み取ることができる。

この点は庄屋屋敷を中心とした居村内の屋敷・神社・寺の配置でもうかがえる。絵図19(写真9)には耕地の所持者や居村内の百姓の家屋敷の位置が明細に描かれているが、居村中央を南北に通る水路を挟んで、西側の地区にそれをみることができる。北側に水路において居村の北端に庄屋屋敷と郷蔵、その南正面に道場(浄土真宗)があり、居村内に百姓の家屋敷が立ち並ぶ。また、字地に庄司坪・佃など中世以来の地名をみることができると、百姓の居住地であれば無関係と思われる馬場という字地も見える。

防御的な村落形態をとっていた最大の要因は、六反村の庄屋であった小枝氏が有力な土豪、在地領主であったことにある。小枝家文書には、戦国期小枝氏が河内守護代遊佐氏や遊佐氏の配下であった行松氏に仕えて転戦し、遊佐信教から知行を与えられた記録が残る(註6)。年次の明らかな天文年間(1532~55年)から元亀年間(1570~73年)にかけて、元は萱振次郎九郎の知行地であった波志者庄(橋波庄、現守口市)辺りに知行を与えられている。これは後の近世の村高で推測すると、ほぼ1万石に相当する。

萱振次郎九郎知行分十七ヶ所、波志者庄之内五郎兵衛分、奥兵衛分、都合三ヶ所之儀申付、全知行肝要ニ候、興福寺以来依相詰如此候、弥忠節専用候、猶行松主膳丞可申候、謹言、

十二月十四日

教判

小枝孫三郎

知行地はこれ以後も受け継がれており、元亀元(1570)年には小枝左馬助(孫三郎)が8月17日に古橋(現門真市)付近の戦闘で討ち死にしたが、同年10月晦日その弟助次郎に変わりなく与えられている。

今度於古橋、小枝左馬助討死、忠節無比類儀、不及是非候、就其知行分之儀無相違申付候、弥忠節肝要候、謹言、

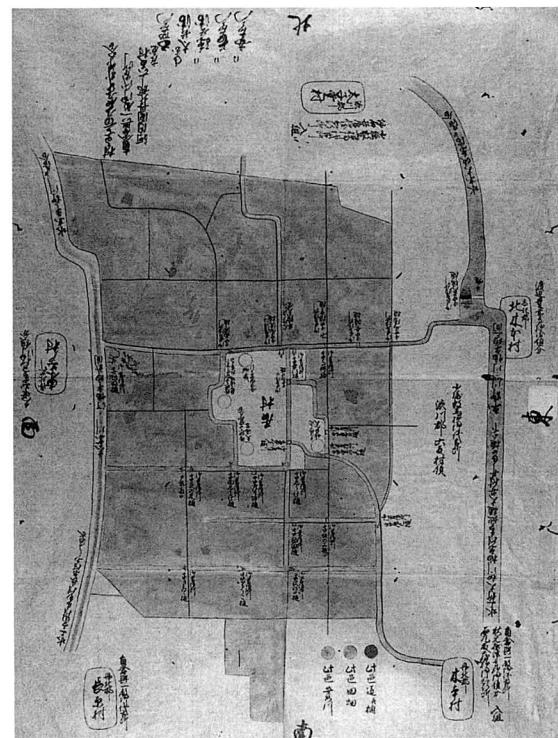


写真8 絵図17 「六反村絵図」 宝曆10(1760)年?

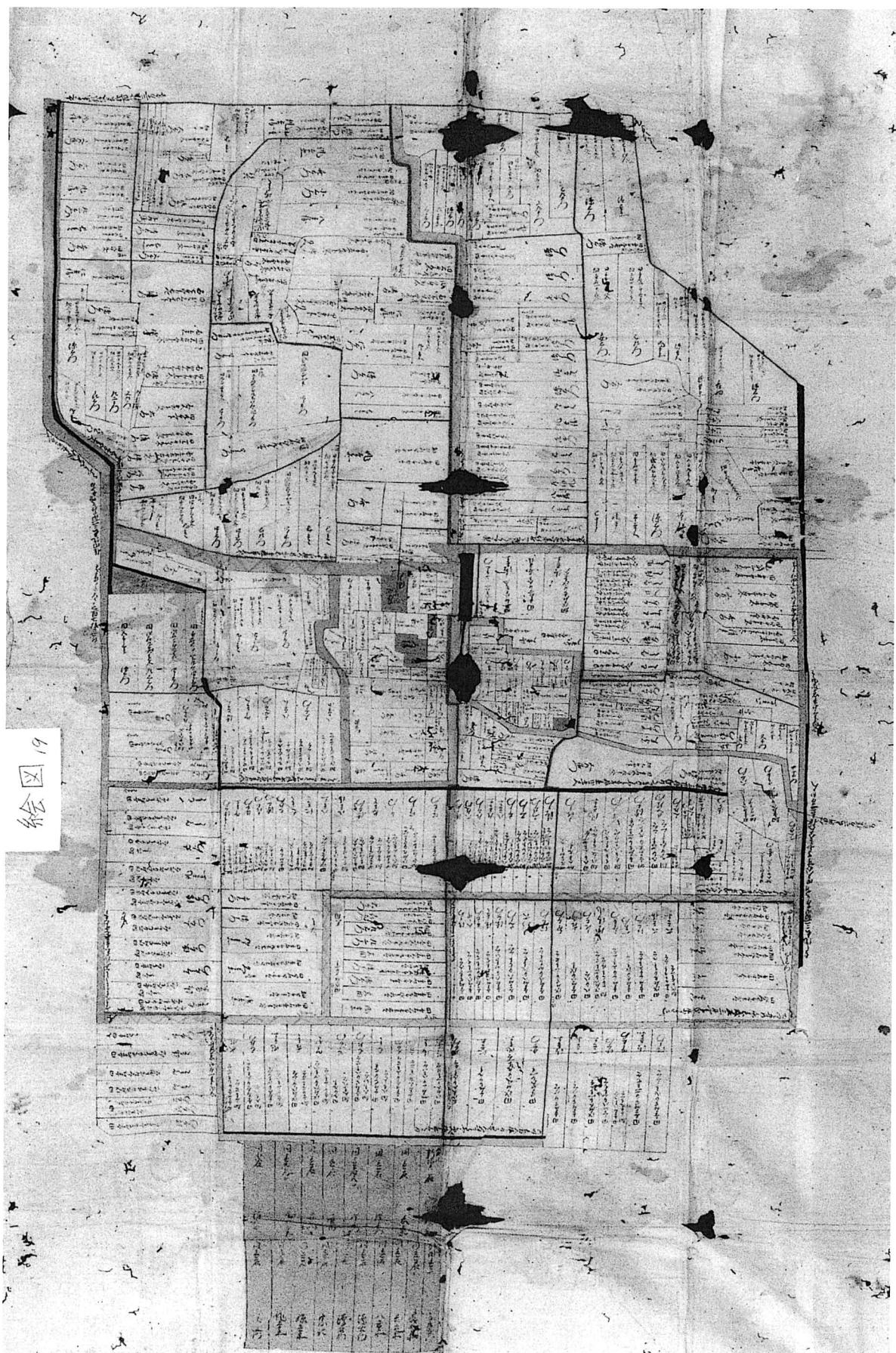


写真9 絵図19 「六反村田畠明細図」 年代不明、明和7(1770)年?

十月晦日

信 教判

小枝助次郎殿

これ以後小枝氏は、遊佐氏が本願寺に味方して織田信長に討ち滅ぼされたときに帰村し土着の道を選び、天正11(1583)年以後の豊臣氏の検地施行によって、百姓身分となった。文禄3(1694)年検地帳には庄屋清兵衛として123石8斗9升7合、8町9反9畝14歩を保有するズバ抜けた名請人(高持百姓)として記載されている。小枝氏は近世を通じて庄屋役を務めることとなる(註7)。

このように、あたかも環濠集落であるかのような形状を示す六反村は、土豪として河内を転戦した小枝氏の居城的意味合いをもっていたといえよう。字地にも馬場のほかに文禄検地帳には「下左衛門町地」という地名も残り、中世以前の村域内での商業地域の設定が推測される。あえていとすれば、六反村は堺や平野郷のような展開は見せなかつたにしても、近世を通じて同様の発展の方向性を持った村の形状を維持し続けていた村であった。

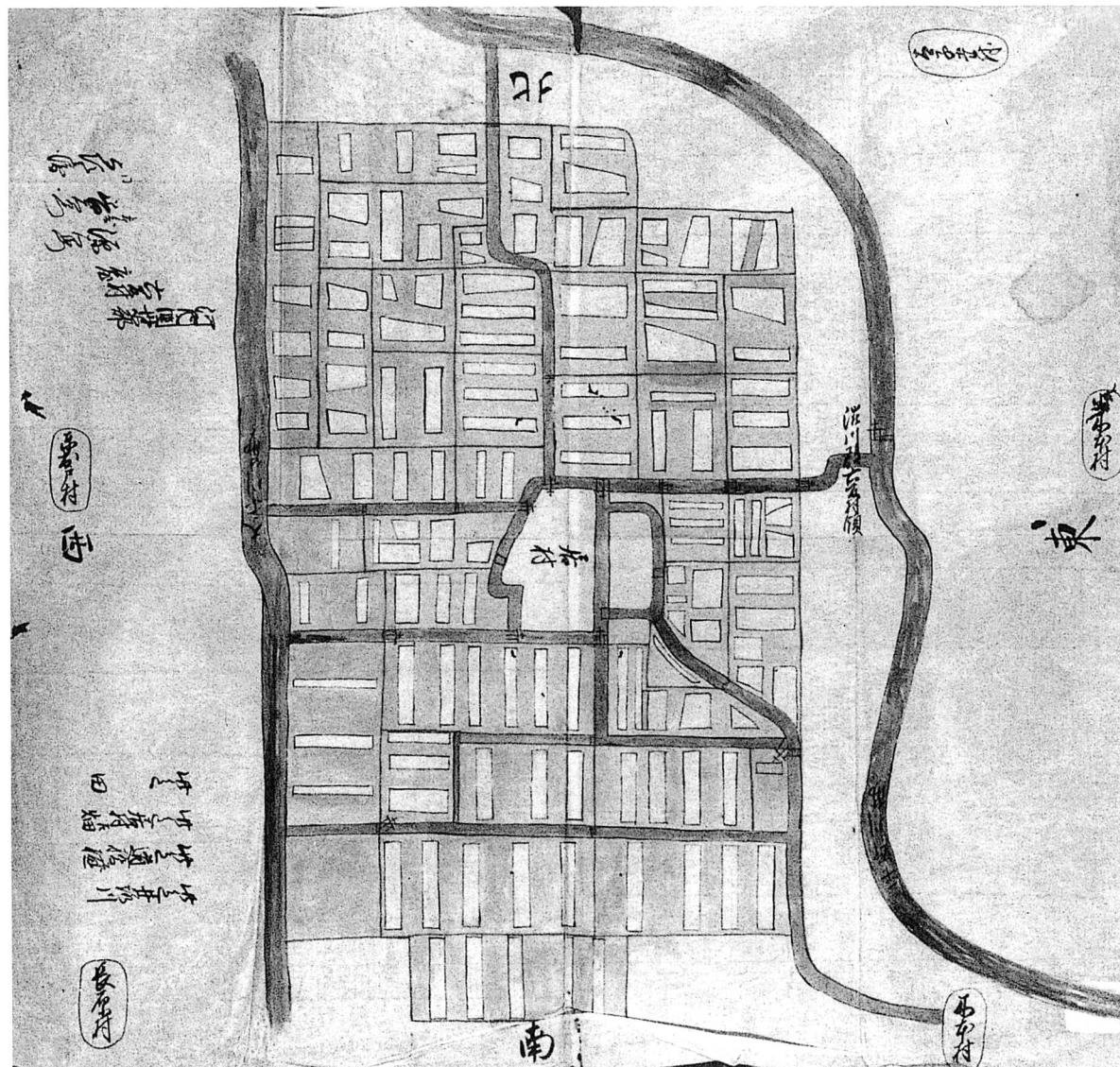


写真10 絵図14 「六反村絵図」 年代不明、明和7(1770)年?

4) 絵図と字地からみた六反村の変化

近世の六反村は、絵図からみればその景観、形状には大きな変化はなかったといえよう。ただその中で、ほぼ長方形の村の形状からすれば、今回の発掘調査地でもある南端部分の張出しが特徴的である。秩序だった村の形状からすれば、後から付け加えられた区域であることが容易に推測される。た

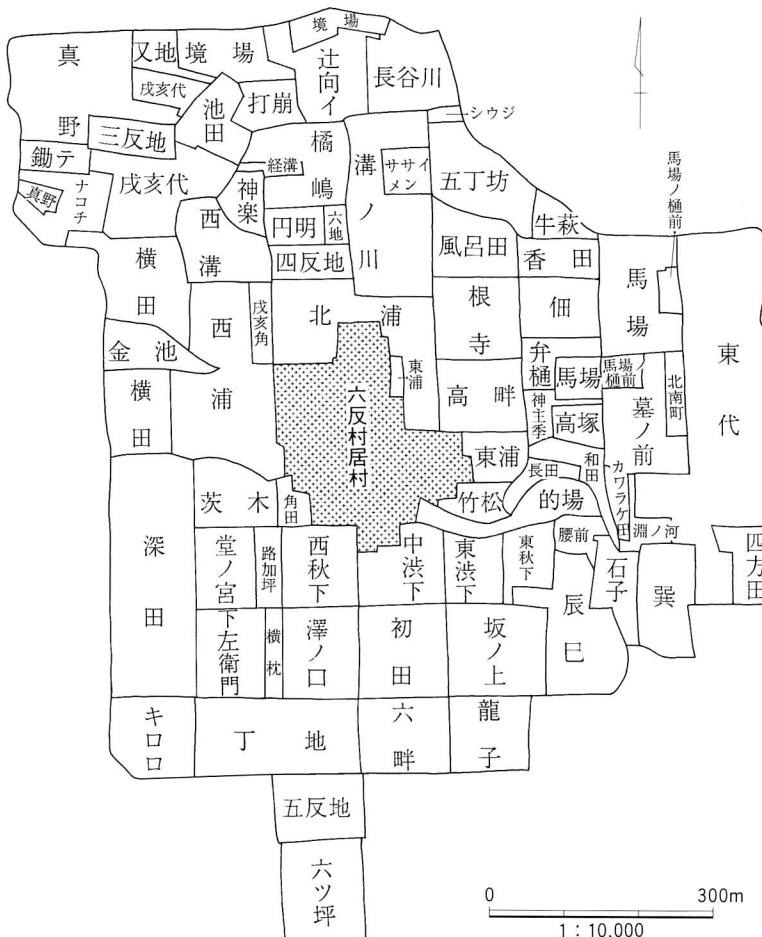


図22 近代の字地 [大阪市文化財協会1982a]より作成
(字「下左衛門」は南西隅近くにみられる)

字地数は28で、絵図の作成年次が寛政8(1796)年であるから、その時点での字地数ということになるが、その字地にさらに小字があったので、実数はこれより多い。

だし、絵図14(写真10)と絵図19には、絵図10(写真2)や12(写真4)などの絵図に描かれる張出し部分のようには描かれていない。絵図14・19の作成は宝暦10(1760)年から安永年間(1772~81年)の間、おそらくは明和7(1770)年頃と考えられるが、この違いの原因は不明である。

これらの点を考慮しながら、
南端の張出し部分について、検
地帳と名寄帳および絵図などに
記された字地名などから検討し
ておきたい。

そこで、まず絵図10に記された字地を書き上げておく。なお先にみたように、水路を境に区域割りされているから、その区分によって8区画に分けて書き上げたので、重複している。

北東部分より

- | | | |
|---|----|------------------------------------|
| 1 | 北東 | ①牛はぎ いそかい ②溝の川 ③溝の川 ④佃 |
| 2 | 東 | ①馬場 ②高津 ③軸田 ④東しらけ ⑤東しらけ |
| 3 | 南東 | ①坂の上 ②辰巳 ③辰巳 |
| 4 | 南 | ①西しら(ふ)け 庄司坪 ②揚田 下左衛門 ③丁地 ④五反地 六の坪 |
| 5 | 南西 | ①きろろ ②深田 |
| 6 | 西 | ①いばらの木 ②深田 ③横田 西浦 ④横田 |

- 7 北西 ①北浦 ②四反地 橋嶋 ③さかい場 ④真野 戊亥代
 8 北 ①さかい場 ②さかい場

これによると、南端の字地名は五反地と六ノ坪である。この字地は、享保11(1726)年の絵図1(写真7)でも描かれており、これ以前の開発であったことが確かめられる。しかも絵図19(写真9)には「新田」と記されているように、新たに開発された地域であった。絵図19によれば、ほぼ1石で均等に18区画に区分されていることから、開発に係わった者たちに均等に振り分けられていることがわかる。

六反村の景観からすれば、五反地と六ノ坪は旧来の景観に新たに付け加えられた景観である。いつ付け加えられたのかが問題である。次にこれを確かめてみよう。

検地は近世の体系的な土地調査である。六反村に残るもっとも古い土地調査は文禄3(1594)年の検地である。その検地帳で字地名を確かめると、小字を除いて31を数えることができる。

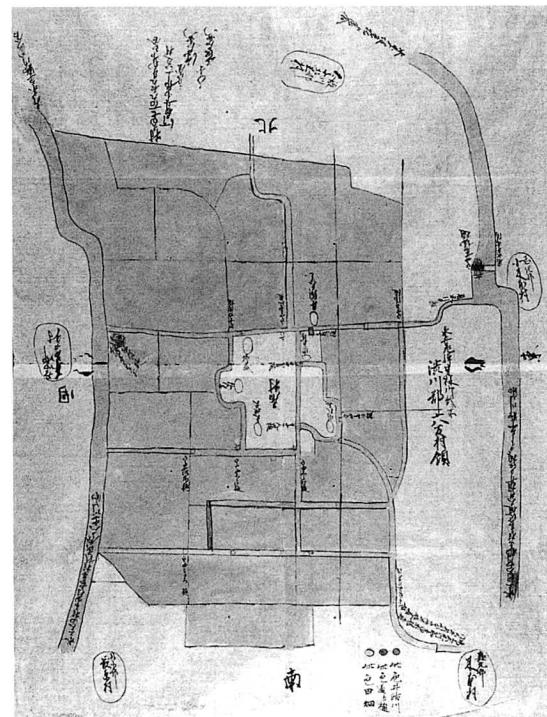


写真11 絵図15 「六反村絵図」
年代不明、明和7(1770)年?

文禄検地帳の字地名

よこ田(横田) ふかた(深田) 下左衛門町地 しらけ よこまくら い原の木 にしゅら
 みそなかわ(溝ノ川) 北うら かんらく(神楽) うちみや みやち いぬい代 なごち
 おきノくい いけた(池田) 北うら(北浦) 辻のむかい はせかかわ(長谷ヶ川)
 いしほうし(石ほうし) さかのうへ(坂の上) さわの口 のかミ(野上) なかしらけ(中しらけ)
 ひかしゅら(東浦) たかくろ(高畔) こん寺(根寺) つぐた(佃) 北そと 五反地
 六ノつぼ(六ノ坪)

後の記録である絵図10の字地名数とほぼ同数であるが、字地名に若干の違いもある。絵図19に新田と記された五反地も六ノ坪もすでに存在し、文禄検地以前の開拓であったことがわかる。字五反地と六ノ坪は文禄検地帳に「より合地」「田地」として記される。

五反地

下 六十間五十間 壱町 三石六斗 より合地

六ノ坪

下 六十間五十間 壱町 三石六斗 田地

ここでは検地によって、いずれも反別1町歩、等級は下田でそれぞれ3石6斗が打ち出されている。しかし絵図19では、五反地が8人に分割され、石高は合計で10石になっている。また六ノ坪も10人に分割され、石高は同じく総計で10石に増加している。この記録からみると、文禄検地以後に新たな開発が行われたと考えられる。

そこで次に、延宝検地帳の字地名を確かめると、新田として五反地と六ノ坪が字地名として載せられている。検地帳に記された字地名は70を数えるが、小字名も含んでいるので、文禄検地時点と比べて2倍強に増えている。

延宝検地帳の字地名

まとてん(的田) 竹松 ひかしら(東浦) 野上 長田 わた(和田) 高塚 遍んすい(弁樋)
 かんぬしき(神主季) 高くろ 北浦 こんてら(根寺) つく田 ばくつく田 かうてん(香田)
 牛はき(牛萩) 五丁ぼ(五丁坊) ふろてん(風呂田) 溝かわ(溝の川) さかいめ(境目) はせか川
 辻向(辻ノ向) さかいば しやうし(庄司) たちはな嶋(橋嶋) けうかう(経溝) だいし
 かんらく 圓明 四反地 西浦かいと 西うら(西浦) 南うら(南浦) 角田 いはらの木
 そとわ本 よこた(横田) 北代 うちくやし(打崩) ほりくろ 西みそ(西溝) いぬい代
 ミのふら 池田 さかい場 又地 まの(真野) まきぼし なこち 三反地 かな地 いぬい角
 ふかた きろろ 丁地 新田 五反地 六ノ坪 六畔 里うご 西しらけ 中しらけ 東しらけ
 たつミ(辰巳) こしまへ(腰前) 堂ノ宮 せうしか坪(庄司ヶ坪) 下ノ左衛門 よこまくら
 沢口 西田 坂ノ上

これによると、五反地と六ノ坪は文禄検地時点で一部が水田化され、延宝検地時点にいたるまでに順次開発が進み、延宝7(1679)年には新たに新田として検地を受けて、それぞれ1町歩10石の本田となったといえよう。

5)おわりに

六反村の村絵図を中心に、その形状と景観の変化を追ってみた。総じて、絵図から見るかぎりは近世の時期に大きな変化はなかったといえよう。中世以前の村の形状のまま明治維新を迎えて、領域的な拡張もなく現在にいたっているとみることができる。たしかに家数の増加や耕地の減少など宅地化が進み、当然のこととして村としての景観はないが、近代以降においても地域的な拡大も縮小もなく、近世の地域的なまとまりを残したまま住宅地に変貌してきたといえよう。

註)

- (1)近世については[川村博忠1990]、[矢守一彦1992]ほか。
- (2)六反村の記録は、注記しないかぎりは小枝伸行氏蔵小枝家文書による。目録は大阪市史編纂所の整理・作成による。
- (3)近世畿内の文禄検地・延宝検地の概況については[新修大阪市史編纂委員会1989]を参照。
- (4)六反村の領主の変遷については宝暦10年の「六反村様子明細帳」、および拙稿[渡邊忠司1984]を参照。
- (5)絵図の番号は「小枝家文書目録」(大阪市史編纂所作成)の整理番号である。
- (6)[田中豊1983]、小枝家文書の紹介である。小枝氏の戦国期関係の史料はこれから引用した。
- (7)六反村の文禄検地帳・延宝検地帳の分析とその名請人の階層構成やその変化については拙稿[渡邊忠司1985]参照。

地図作製年代一覧(目録順)

絵図1 [稻垣摂津守所替之時被召六反村絵図]	享保11(1726)年3月
絵図2(袋入)	
*[新大和川筋六反村絵図](新大和川開削後の樋・井路筋概略図)	享保17(1732)年閏5月
*[石原清左衛門ヨリ井上河内守へ引渡之節絵図]	宝暦6(1756)年9月
*野附覚(村内井路の名前と長さ、および樋門の位置図)	- · 8月
*[六反村絵図](彩色)(居村および耕地・井路図)	
(庄屋五郎右衛門・年寄太兵衛・孫兵衛・善右衛門・安右衛門)	[宝暦10(1760)年]
*[六反村絵図](彩色)(居村および耕地・井路・堰入図)	
(代官角倉與一殿代官所、預り所)	[宝暦10(1760)年]
(庄屋五郎右衛門・年寄太兵衛・孫兵衛・善右衛門・安右衛門)	
*[大和川・石川落合付近水利図](彩色)(新大和川開削後の落合)	
(宝永元年大和川付け替え以後の図)	- (年次不明)
*[大乗川筋絵図](大乗川川と平野川の落合付近水車図)	- (年次不明)
*[平野川筋ヨリ六反村樋尻迄絵図](井路図)	
(絵図説明書・大黒天図略)	
絵図3 [六反村田畠略絵図](彩色)	寛保3(1743)年12月
絵図4 旱川之節水尾跡江堀仕形絵図(彩色)	宝暦10(1760)年12月
絵図5 [川筋水論ニ付立会絵図](彩色)	安永9(1780)年2月
絵図6 [村絵図](彩色)	(寛政3年)(1791)12月
絵図7 [水論絵図](彩色)	寛政6(1794)年11月
絵図8 [水論絵図]	寛政6(1794)年11月
絵図9 [水論絵図]	寛政6(1794)年11月
絵図10 [六反村田畠井路絵図](彩色)	寛政8(1796)年9月
(池田仙九郎代官所、庄屋善右衛門・与次兵衛)	
絵図11 [対南木本村水論ニ付龜絵図](彩色)	文化14(1817)年10月
絵図12 [六反村田畠井路図](彩色)	天保14(1843)年7月

(庄屋彦五郎、年寄又左衛門)	
絵図13 [六反村絵図](彩色)	-[不明、宝暦10(1760)年以後]
(角倉與一殿御代官所、庄屋五郎右衛門、年寄太兵衛・孫兵衛)	
絵図14 [六反村絵図](彩色)	-[不明、明和7(1770)年?]
(庄屋源右衛門、年寄善右衛門・与次兵衛)	
絵図15 [六反村絵図](彩色)	-[不明、明和7(1770)年?]
(庄屋源右衛門、年寄善右衛門)	
絵図16 [六反村絵図](彩色)	-[不明、明和7(1770)年?]
(庄屋源右衛門、年寄善右衛門)	
絵図17 [六反村絵図](彩色)	-[不明、宝暦10(1760)年?]
(角倉與一殿代官所、庄屋五郎右衛門、年寄太兵衛・孫兵衛・善右衛門・安右衛門)	
絵図18 [六反村絵図](彩色)	- (不明)
(庄屋彦五郎、年寄源右衛門)	
絵図19 [六反村田畠明細図](彩色)	- (不明)
(田畠所持主名と反別をすべて表示)	
絵図20 [六反村田地図]	- (不明)
(字荒堀の田地図)	
絵図21 [六反村略図]	- (不明)
絵図22 [大和川筋村々里程図](彩色)	- (不明)
絵図23 [新大和川水利図](上本町狩野武兵衛書)(彩色)	- (不明)
絵図24 [新大和川筋水利図](下書)	- (不明)
絵図25 [平野川筋水利略図](彩色)	- (不明)
絵図26 [了意川筋水路略絵図]	- (不明)
絵図27 [六反村水路絵図](彩色)	- (不明)
絵図28 [六反村水利略絵図]	- (不明)
絵図29 [六反村水利略絵図]	- (不明)
絵図30 [大井村井手口門樋水論之立会絵図]	- (不明)
絵図31 [六反村付近水利絵図]	- (不明)
絵図32 [六反村井路略絵図](渋川郡)	- (不明)
(庄屋源右衛門、年寄善右衛門、百姓代仁兵衛)	
絵図33 [六反村付近水利絵図]	- (不明)
絵図34 河内国第二大区一小区道路之図	- (不明)
絵図35 河内国第二大区一小区道路之図	- (不明)

第Ⅳ章 まとめ

今回の主たる調査成果として、弥生時代の自然流路の検出と、花粉分析による飛鳥時代から現代にいたる自然環境の復元が挙げられる。まず、前者を既調査成果から位置付けたい。

弥生時代のNR1001は第10層(長原8B層)を切込んで形成されている。しかし下層の第12a層(長原9B層)上面に古い落込みSX1201があり、粘土質シルトの第11層(長原8B～9A'層)は調査区全体にほぼ均等の厚さで堆積する。SX1201の位置を踏襲してNR1001は東から西へ流れている。

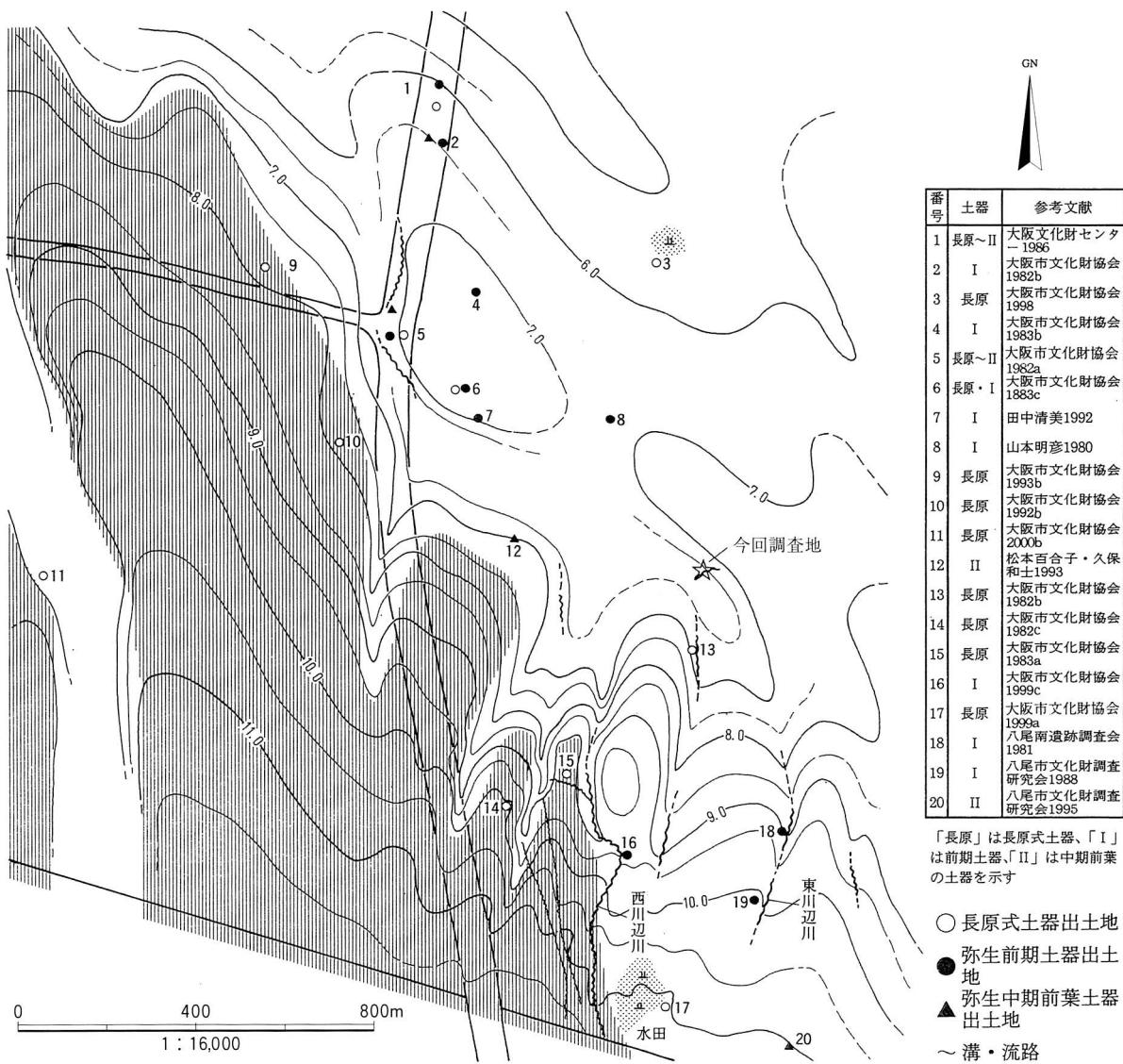


図23 長原9A層上面の埋没古地形と集落の分布

[大庭重信1999]図82に加筆

当調査地南方のNG82-26次調査地(図23の13地点)では、幅5.5m以上、最大深度0.95mの南北方向の流路SD06が検出されており、埋積する土砂は長原9A~10層までの同時異相とされる[大阪市文化財協会1982b]。また、SD06の上層には、長原8層で埋没する幅220~260cm、深さ20cmのSD04が存在する。SX1201はこのSD06と一連の流路の可能性もあり、NR1001はSD04と一連のものであろう。当地は図23によると、北へ延びる谷筋が北西方向へ大きく進路を変えるところに位置するから、NR1001やSX1201が東西方向を示すことも首肯できる。

[大庭重信1999]は長原遺跡の弥生時代水田を灌漑する水路と集落分布を検討しているが、当調査地や上記13地点が位置する谷筋は「東川辺川」と「西川辺川」が流れ込む谷地形に位置することがわかった。水田域は東・西川辺川にはさまれた地形を巧みに利用し、狭い範囲で完結した水利システムを有するという。西川辺川の西側には段丘層を掘削して造られた同川から取水する用水路が3本あり、いずれも造成にかなりの労働量を要したと考えられる。この西川辺川で最大幅約8m、深さ約2mである。水田の経営主体の集落は、弥生時代前期の遺構・遺物の分布を見ると、沖積平野部の自然堤防上と台地末端の沖積微高地上の2個所にまとまりを見せている。続く中期前葉では、沖積平野部の3個所、台地東端部の1個所で住居などが確認されており、前期の活動エリアを基本的に踏襲しているといえるようだ。

今回の調査地は縄文時代晩期から弥生時代の遺物量も少なく、水田も検出されなかつたが、NR1001が東・西川辺川の排水(悪水)を集めて西に流す、灌漑体系を補完する役割を与えられた可能性はある。

次に花粉分析から、今回調査地の第2層が形成された江戸時代に、人為により森林植生が極端な破壊を受け、アカマツの二次林が急速に広がり、水稻耕作やソバの栽培のほか、アブラナやワタなど商品作物の栽培が始まったことがわかった。当地が旧六反村々域に属すことは小枝家文書の文禄3(1594)年の検地帳まで追え、その頃は豊臣家直轄地であった。また、慶長18年分の「年貢算用目録」によると肥料として「油かす」のほかに、金肥である「いわし」が使用され、綿作がすでに始まっていた可能性があり、綿作は六反村では遅くとも寛永9(1632)年には確実に行われていた(同年の年貢中に「わた」分の記載あり)。花粉分析は江戸時代の周辺部の開発や、綿作を裏付ける結果をもたらした。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1982a、『長原遺跡発掘調査報告』

1982b、『近畿財務局公務員宿舎建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG82-26)略報』

1982c、『長原遺跡発掘調査報告』II

1983a、『長原遺跡発掘調査報告』III

1983b、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』

1983c、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』

1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II

1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III

1992b、『長原遺跡発掘調査報告』V

1993a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』V

1993b、『大阪市民生局による建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG93-1)略報』

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VII

1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VIII

1996a、『大阪市都市整備局による長吉長原東住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-36)略報』

1996b、『長原遺跡発掘調査報告』VI

1997、『大阪市都市整備局による長吉長原東第2住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-103)略報』

1998、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告』

1999a、『長原遺跡発掘調査報告』VII

1999b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XII

1999c、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XIV

2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』III

2000b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV

2000c、『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』

2002a、『長原遺跡発掘調査報告』IX

2002b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V

2002c、『長原遺跡発掘調査報告』VIII

大阪文化財センター1986、『城山』(その1)

大庭重信1999、「弥生時代中期前葉の水田とその経営主体」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』VII、pp.97-100

大橋康二1994、『古伊万里の文様』 理工学社

川村博忠1990、『国絵図』 吉川弘文館

- 九州近世陶磁学会2000、『九州陶磁の編年』
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』I
- 小山正忠・竹原秀雄1967、『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 酒井龍一1974、「石庖丁の生産と消費を巡る二つのモデル」：『考古学研究』第21卷第2号、pp.23-36
- 新修大阪市史編纂委員会1989、『新修大阪市史』第3巻
- 田中清美1992、「河内平野の開拓と弥生文化」：『考古学論集』第4集、pp.29-50
- 田中豊1983、「小枝家文書」：『大阪の歴史』第10号、pp.62-83
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
- 中世土器研究会1995、『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』
VII、pp.41-44
- 2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7-28
- 松本百合子・久保和士1993、「石器作りの家」：『葦火』45号、pp.4-7
- 八尾市文化財調査研究会1988、「八尾南遺跡(第7次調査)」：『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』(財)八尾市
文化財調査研究会報告16、pp.34-38
- 1995、「八尾南遺跡(第8次調査)第4章 まとめ」：『八尾南遺跡』(財)八尾市文化財調査研究
会報告47、pp.116-130
- 八尾南遺跡調査会1981、『八尾南遺跡』
- 山本明彦1980、「河内・長原遺跡の調査」：『盾列』6号 奈良大学考古学研究会、pp.29-31
- 矢守一彦1992、「古地図への旅」 朝日新聞社
- 渡邊忠司1984、「近世前期の村落と年貢収納－河内丹北郡六反村を事例として－」：『ヒストリア』105号、pp.40-61
- 1985、「近世前期村落の階層構成と耕地移動－河内国六反村の場合」：『大阪の歴史』第14号、pp.1-33

あとがき

長原遺跡が大阪市営地下鉄谷町線の延伸工事で見つかってから、今年でちょうど30年になる。発掘調査が行われた面積も遺跡全体の5パーセントに達した。

30年は近代科学としての「日本考古学」120年余りの歴史から見ると、まだまだヒヨッコの感が拭えないかも知れないが、この間に蓄積した資料は、中河内の“2万数千年の通史”が書けるほど内容が充実している。今回は旧六反村内での調査でもあったことから、庄屋であった小枝家に良好に残っている中近世史料と、花粉分析を交えた接近法を試みた。隣接科学との共同作業は、地域の歴史をより豊かにすると思う。

市営住宅の新築で、新しい住民も増えるであろう。旧住民のみならず、新住民にも受け入れてもらえるような「長原や六反の歴史」をこれからも継っていこうと思う。

末筆ではあるが、本書をなすに当って関係各位には並々ならぬ協力を賜った。改めて謝意を表すとともに、今後とも当協会の事業への変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げる次第である。

(高橋 工)

索引

〈遺構・遺物に関する用語〉

M	MT85	12	縄文	1, 12, 17, 40	
T	TK216	11	縄文土器	12	
	TK217	11, 12	照葉樹林	24, 25	
	TK43	12	せ 石器	1, 3, 6, 15, 17, 18	
	TK47	11	た 高持百姓	27, 33	
あ	アカマツ	25, 40	と 東播系	11	
	字地	31, 33~36		倒木痕	8, 13
	飛鳥 I	12		豊臣氏領	29
	飛鳥 II	12	な 名請人	37	
	飛鳥 III	11	長原式	1, 12, 15	
	アブラナ	25, 40	は 白磁	10	
	暗文	11	幕領	3, 29, 30	
い	生駒西麓	12, 15, 16	ひ 肥前磁器	9	
	石庖丁	15, 16	肥前陶器	9, 10	
え	延宝検地	27, 28, 29, 36, 37	備前焼	10	
か	花粉	19, 20, 21~25, 39,	ふ 踏込み	17, 18	
		40	文禄検地	27~29, 33, 35, 36,	
	唐津焼	10		37	
	韓式系土器	2, 17	へ 平城宮 III	11	
け	検地	27, 33, 35, 36	平城宮 V	11	
	検地帳	3, 27, 33, 34, 35,	平城宮 VI	11	
		36, 40	ほ 方形周溝墓	1, 3	
こ	小枝(家)	3, 4, 27, 31, 33,	掘立柱建物	2	
		37, 40	め 明細帳	27, 37	
	コナラ	24, 25	や 弥生土器	1, 12, 15	
さ	指出検地	27	よ 横形剥片	12	
	サヌカイト	12, 16	わ ワタ	25, 40	
し	滋賀里 III式	12			

〈地名・遺跡名など〉

う 馬池谷	2	六反村	3, 4, 26~38, 40
瓜破台地	1, 19		
か 河内台地	1		
ひ 東除川	2		
や 八尾南遺跡	3		
ろ 六反地区	26, 27, 29		

**Archaeological Report
of
Nagahara Site in Osaka, Japan**

Volume X

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 2001

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

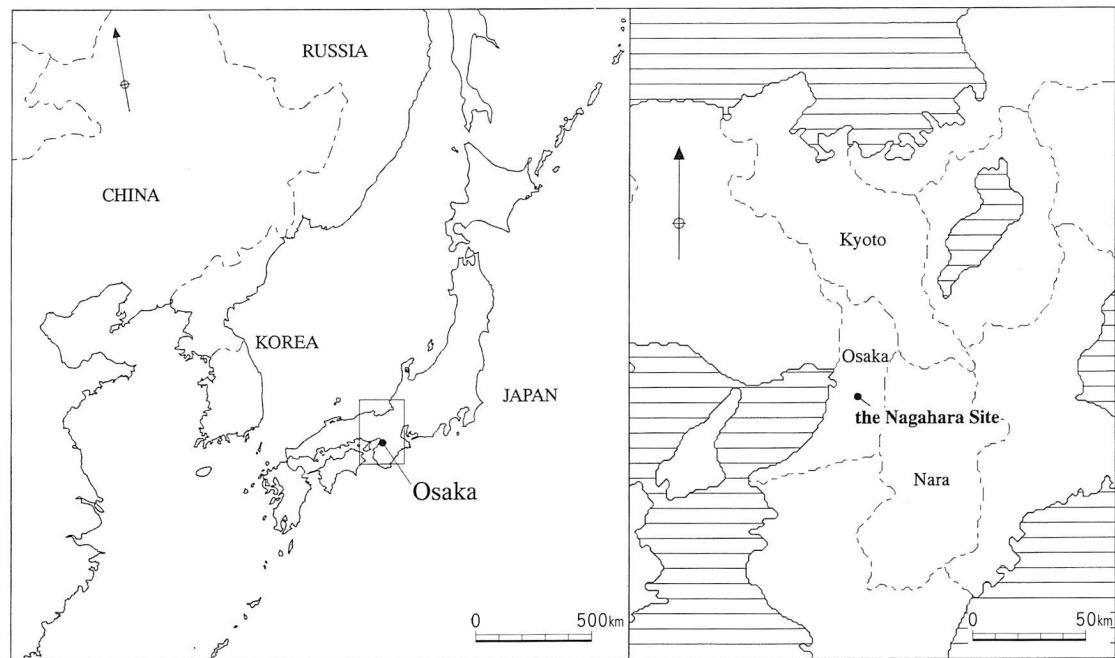
Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

NR: Natural stream

SD : Ditch

SX : Other features



CONTENTS

Foreword
Explanatory notes
Acknowledgement

Chapter I Outline of investigations at the Nagahara Site	1
S.1 Site Location and Historical Setting	1
S.2 Former investigation results in the Eastern Sector of the Nagahara Site	3
Chapter II Investigation results	5
S.1 Background and progress of research	5
S.2 Stratigraphy / Features and remains	7
1) Stratigraphy of the investigation area	7
2) Remains of the Strata	9
3) Features of the Pre-Jomon period	13
4) Features and remains of the Yayoi period	13
5) Features from the Medieval to Modern period	17
6) Conclusion	17
Chapter III Discussion of features and remains	19
S.1 Palynological study of NG01-32	19
1) Introduction	19
2) Sampling	19
3) Method	19
4) Results	20
5) Discussion	24
6) Conclusion	25
S.2 Setting and Changes in Rokutan village Tanpoku county, Kawachi province based on the village drawings in the Edo period	26
1) Introduction	26
2) Survey of real estate in the Edo period and settlement of village area	27
3) Distinctive feature of Rokutan village from the village drawings	29
4) Changes in the Rokutan village deciphered from the village drawings and village sections	34
5) Conclusion	36
Chapter IV Conclusion	39
References	41
Postscript / Index	
English Contents and Summary	
Extract	

SUMMARY

This volume details the results of excavation undertaken in the Nagahara site in 2001 prior to the development of the Municipal Apartmenthouse complex. The site is located in the Hirano Ward in the southeastern sector of Osaka city, Japan.

The excavated area is part of the eastern sector of the Nagahara site and it is geographically situated on the Kawachi alluvial plain. Materials dating between the Late Paleolithic and the Edo (17th -19th century) periods were investigated. The excavation offered information of the environmental conditions during one phase of the Yayoi period. The following three points are the outline of the main results.

Firstly, pottery remains and a stone reaping knife were found in a large natural stream from the Middle Yayoi period. In the eastern sector of the Nagahara site Yayoi period irrigation ditches were detected. This natural stream seems to have been connected with the development of paddy fields in the alluvial plain.

Secondly, a field covered with gravel has been interpreted as having been caused by a flooding during the Early medieval period. Numerous footprints on the alluvial field may represent the action of people just before the inundation.

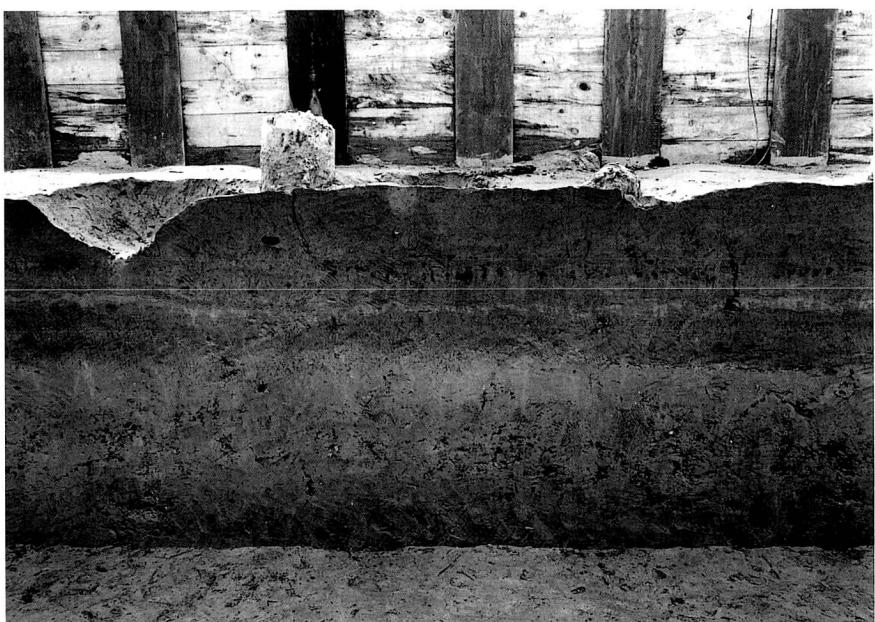
Thirdly, a large quantity of pollen was detected from the strata. Pollen analysis revealed that the natural environment was worked and altered during the Edo period. This site is located in the old Rokutan village, which possess a large number of documents and drawings from the medieval and the Edo period. These documents confirmed the results of the pollen analysis.

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ながはらいせきはつくつちょうさほうこく10						
書名	長原遺跡発掘調査報告X						
副書名	市営長吉長原東第2住宅第3期建設工事に伴う発掘調査報告書						
編著者名	黒田慶一・高橋工・松江実千代・渡邊忠司						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833						
発行年月日	西暦 2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしらのく 大阪市平野区 ながよしきくたん 長吉六反3丁目	市町村 27126 遺跡番号 —	34°36'00"	135°34'40"	20011009~20020327	780m ²	市営住宅の 建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
長原遺跡	流路	縄文時代			縄文土器(晚期)		
		弥生時代	流路		磨製石器(石庖丁)・弥生土器		
		古墳時代			土師器・須恵器		
		飛鳥時代			土師器・須恵器		
		鎌倉・室町時代	足跡				
		江戸時代			陶磁器		

図 版

第1～6b層
(東壁中央)



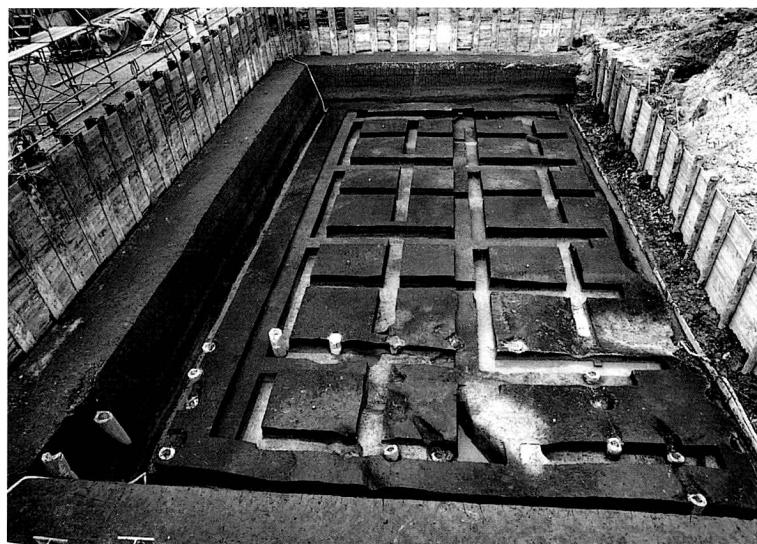
第6c～17層
(北壁中央)



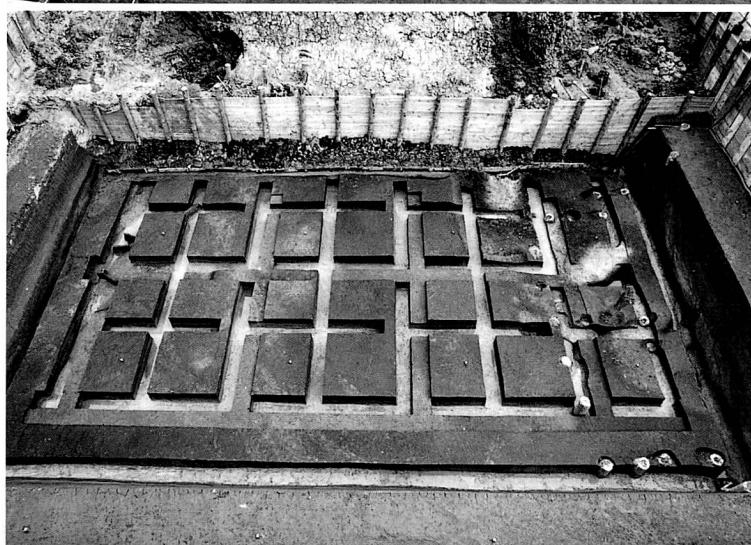
東区NR1001断面
(南東から)



図版一 西区第15・16層上面調査状況



トレンチ配置(南から)



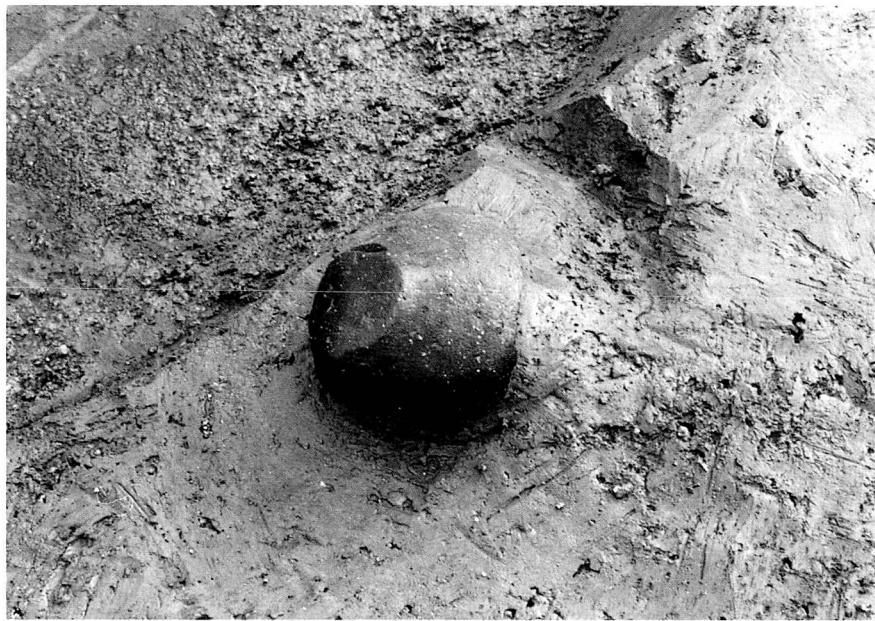
トレンチ配置(西から)



北端
第16層上面の流路
(西から)

図版三 弥生時代流路 遺物と第16層上面検出状況

東区土器出土状況
(北から)



西区石器出土状況
(北西から)

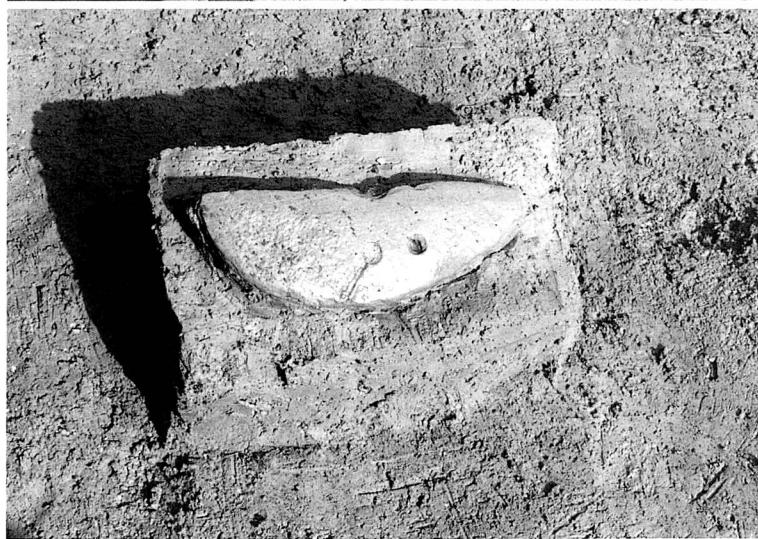


東区第16層上面全景
(東から)





NR1001
空中写真(合成)



東区石庖丁出土状況

西区全景
(西から)



西区NR1001
(北から)



西区NR1001断面
(北東から)





東区
第5層上面検出足跡
(北から)

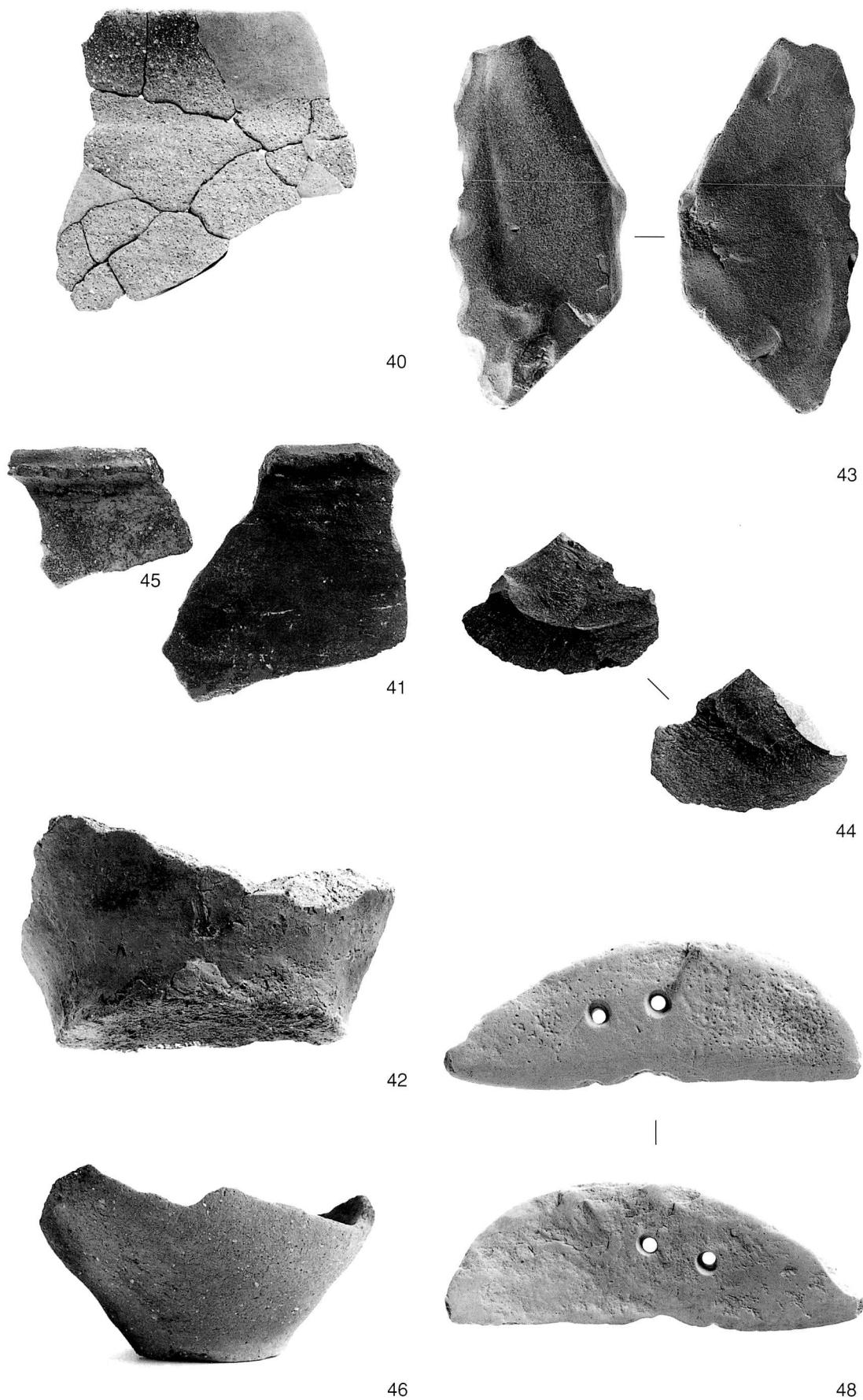


市営住宅建設工事直前の畠
(南から)



市営住宅建設工事直前の畠
(東から)

図版七 繩文～弥生時代の遺物



NR1001(43・45・46・48)、第10層(44)、第11層(40)、第12a層(42)、第13層(41)
[43・44は縮尺約9/10、48は約1/2]



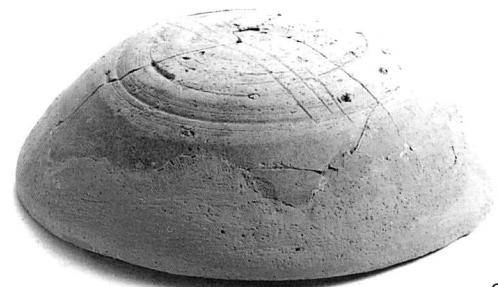
34



22



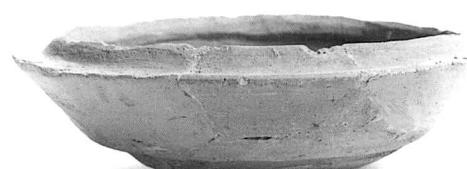
35



24



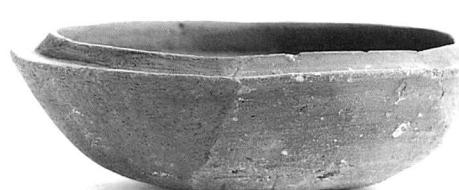
|



36



25



26



37



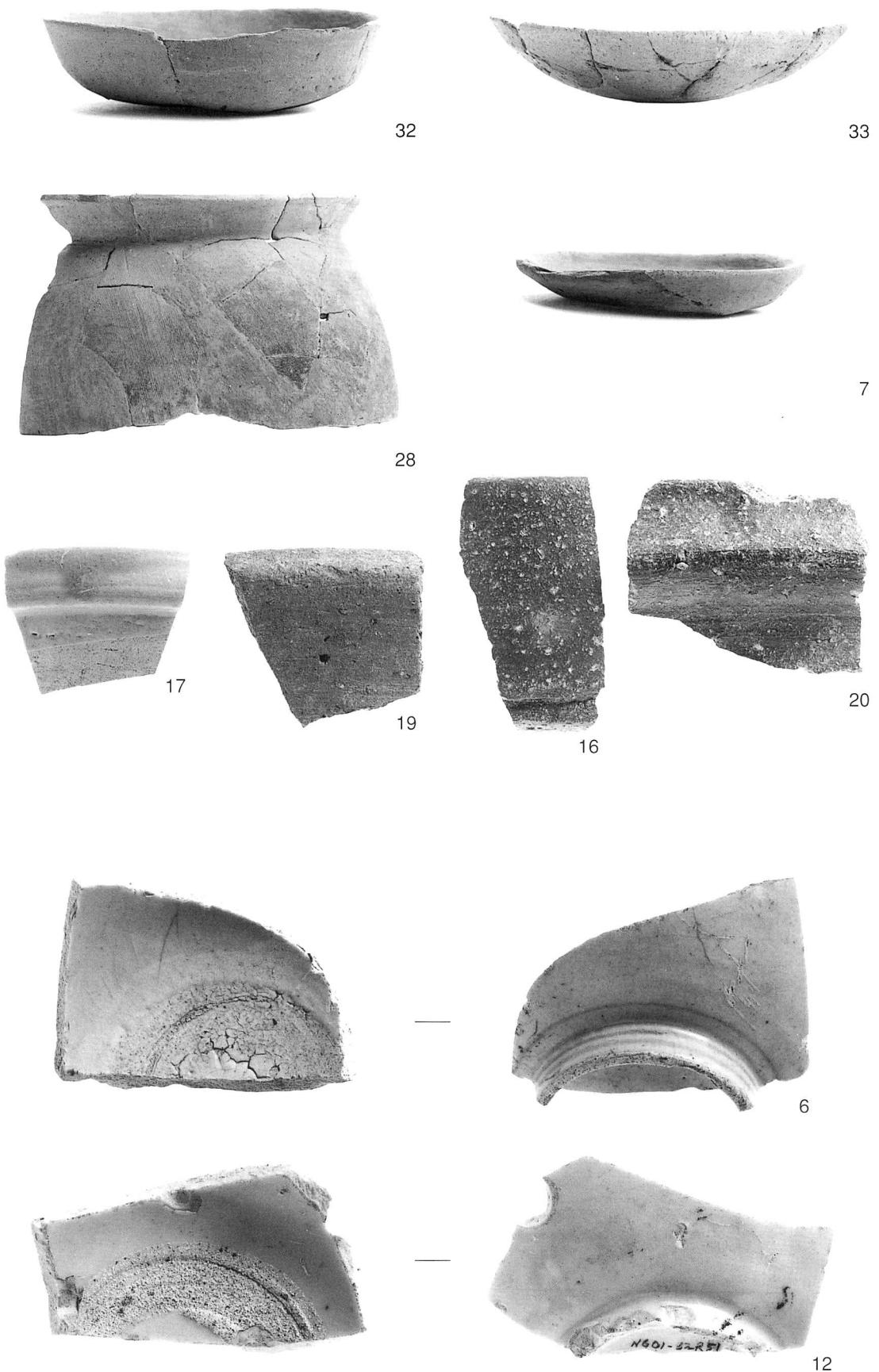
29



31

第6c層(24・29・31)、第7層(22・25・26)、第8層(34・35・37)、第9層(36)

図版九 古墳～江戸時代の土器・陶磁器



第1層(7)、第2層(6・12・16・17・19・20)、第6c層(28・32・33)

大阪市平野区 長原遺跡地区発掘調査報告 X

ISBN4-900687-67-7

2003年3月31日 発行◎

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558-0004 大阪市住吉区長居東 3-4-17

**Archaeological Report
of
Nagahara Site in Osaka, Japan**

Volume X

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 2001

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of
Nagahara Site in Osaka, Japan**

Volume X

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Municipal Apartmenthouse complex
in 2001

March 2003

Osaka City Cultural Properties Association

『長原遺跡発掘調査報告』 X 正誤表

頁	行など	誤	正
11	図8キャプ	(24・27・ <u>28</u> ~33)	(24・27~33)
i (索引)	左17	27, <u>28</u> , 29, 36	27 <u>~</u> 29, 36
i (索引)	左18	19, <u>20</u> , <u>21</u> ~25	19~25
i (索引)	左23・24	33, <u>34</u> , <u>35</u> , 36, 40	33 <u>~</u> 36, 40
i (索引)	左29	12, 16	12, 16, <u>17</u>
i (索引)	右19・20	33, 35, <u>36</u> , 37	33, 35 <u>~</u> 37

